

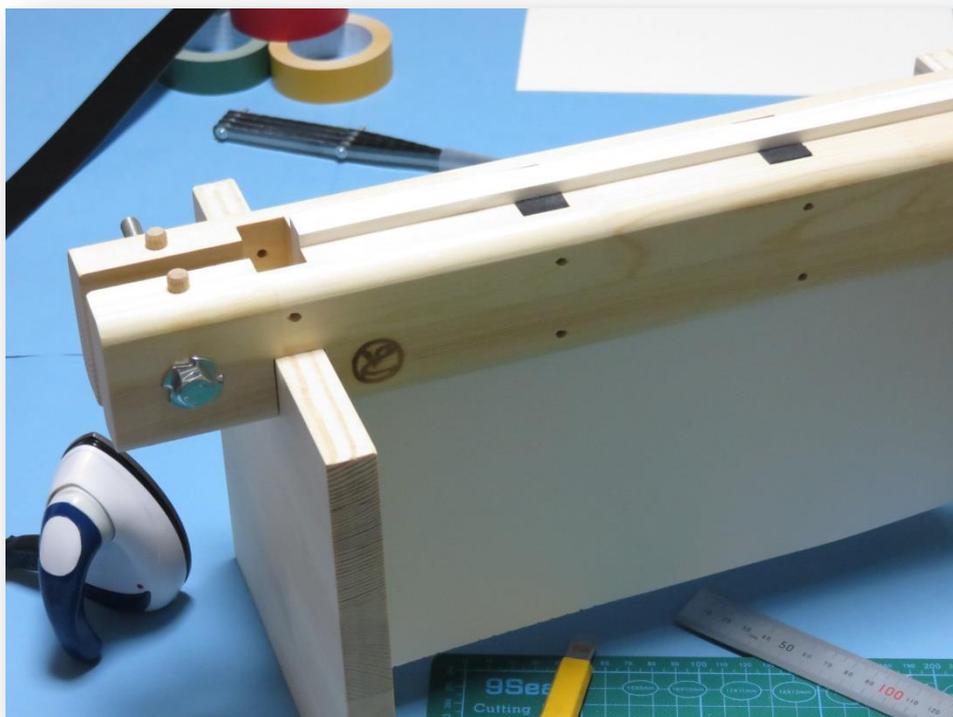
製本工房

とじ助 

SeihonKobo Tojisuke

初心者でもかんたん・きれいに製本できる
ホットメルトシートと製本テープを使った

手製本の手引き



目次

本づくりに必要な知識.....	9
本の各部の名称.....	9
道具と材料.....	11
製本機.....	11
定規*.....	11
折りヘラ.....	12
ボンド*.....	12
カッター・ハサミ*.....	13
アイロン*.....	13
カッティングマット.....	13
補強和紙.....	14
製本用ホットメルトシート.....	15
スティックのり.....	16
金ノコ.....	16
グルーガン.....	17
製本用ホットメルトスティック.....	17
製本用ホットメルトチップ.....	18
製本テープ.....	18
本をつくる.....	19
◆入門編◆30分で完成！ホットメルトシートと製本テープを使った本の作り方 [50枚（100ページ）程度の冊子の製本方法].....	19
道具.....	19
材料.....	20
工程.....	21
本文を固定する.....	21

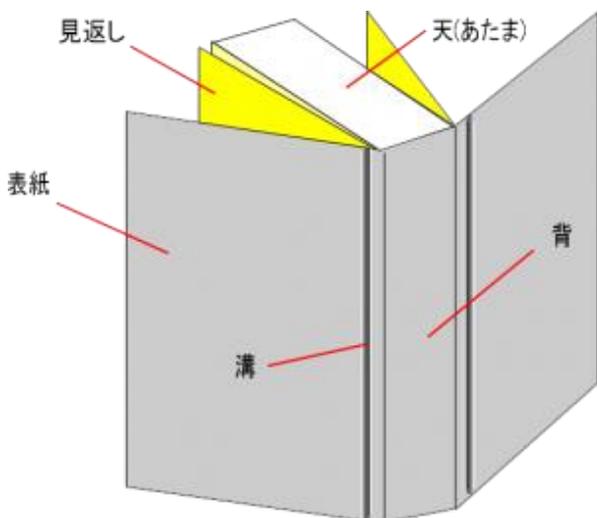
ホットメルトシートと補強和紙をカットする	24
背にアイロンをあてる	26
平にアイロンをあてる	29
製本テープを貼る	31
製本テープにアイロンをあてる	36
小口を裁断する（化粧断ちする）	37
◆初級編◆グルーガンを使った本の作り方 [30枚（60ページ）程度の小冊子の製本方法] 39	
道具・材料	39
表紙を作る	40
背をのりづけする	41
アイロンをあてる	43
裁断する（化粧断ち）	44
完成	44
◆中級編◆ホットメルトシートと製本テープを使ったハードカバーの本（写真集）の作り方 [プリンター印刷した写真の製本方法]	46
道具	46
材料	47
工程	49
原稿の作成	49
溝切り	50
綴じ	54
見返しの作成	61
表紙の作成	64
表紙貼り	68
見返しの糊入	70
完成	71
付録	73
製本用ホットメルトシートの作り方	73

用意するもの	73
作り方	73
広告	76
お問い合わせ・ご購入	77

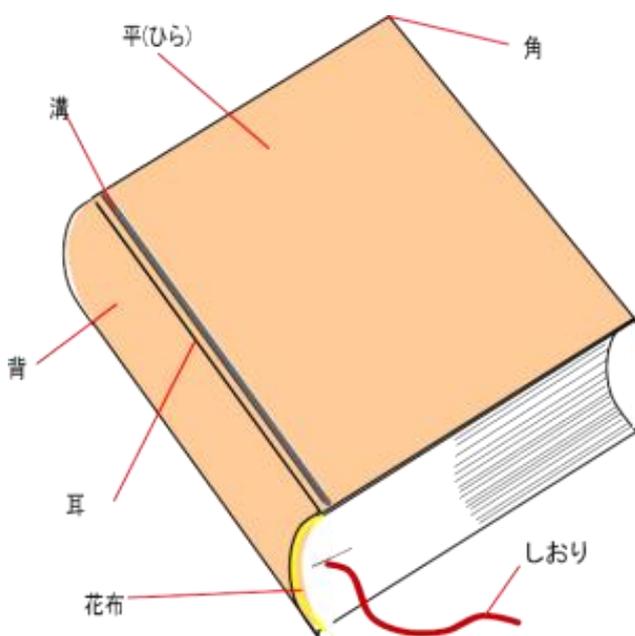
本づくりに必要な知識

本の各部の名称

製本の用語や本の各部の名前は、昔から呼び習わされた特殊な用語が少なくありません。馴染みのないものもありますが、作り方を説明する上で用語を使ったほうがスムーズに説明できることも多いため、すべてを覚える必要はありませんが、ひと通り目を通しておいてください。



表紙側からみた本の部分の名称



本を寝かした状態での各部位の名称

本文 (ほんもん) ー 本の中身の部分。

表紙 ー 本来は中身を保護するものですが、タイトルを入れたり、装飾などをほどこして本に個性を持たせる部分でもあります。

背 ー 中身を綴じて背固めした部分を本の背、それを覆う表紙の部分を背表紙といいます。

溝 ー 表紙と背表紙の隙間の部分。表紙を開くときの蝶番の役割をします。

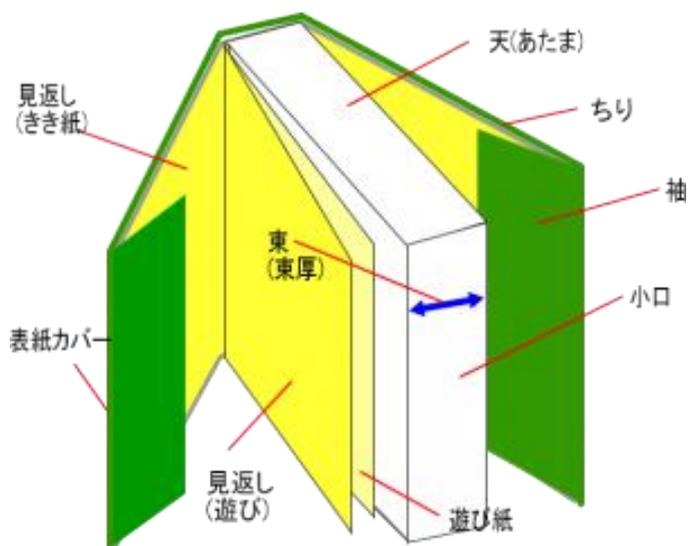
平 (ひら) ー 表紙の平らな面。表紙を付ける前の平らな面も平といいます。

角 (かど) ー 小口の直角の部分。

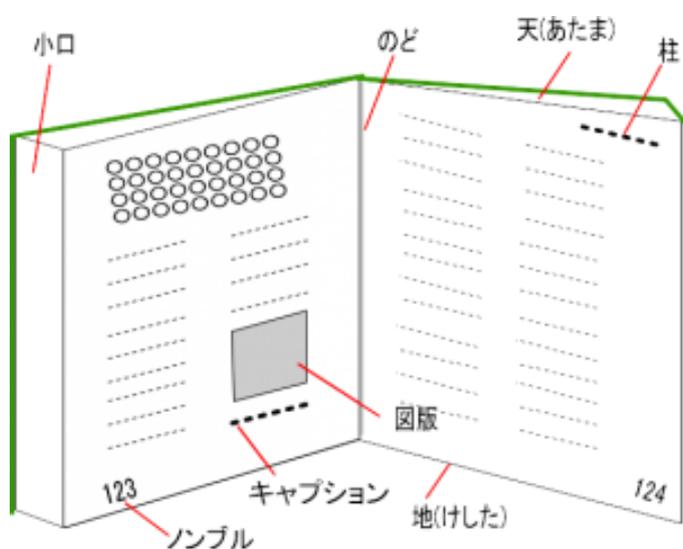
耳 ー 本の背の部分を平より少し高く出るように加工した部分です。

しおり ー 本にはさみこんである紐。

花布 (はなぎれ) ー 本の背の両端に貼り付ける布。



本文側から見た本の部分の名称



ページを開いた状態での各部位の名称

天（あたま）－本文の上側。

地（けした）－本文の下側。

ちり－本文よりも外側に出ている表紙の部分。

小口－本文の前側、ページを開くところです。前小口ともいい、上辺を天の小口、下辺を地の小口といいます。

束（つか）－本文の厚さ。束厚ともいいます。

見返し－表紙と本文のつながりを強くするために、表紙と裏表紙に貼る紙。表紙の裏に貼る方を「効き紙」、残った方を「遊び（紙）」といいます。

表紙カバー－表紙にさらにかぶせる紙。表紙の保護と装飾の目的で使われます。

袖－表紙カバーの表紙内側に巻き込む部分。

のど－本をとじる部分。

ノンブル－ページを表す数字。

道具と材料

手で本を作るのに必要な道具です。たくさんありますが、いきなりすべて揃える必要はありません。たとえば、製本機は本文を固定するものですが、大型のクリップでも固定は可能ですし、カッティングマットは古雑誌や古新聞でも代用できます。まずは基本的なものだけそろえて、必要に応じて増やしていきましょう。

*印以外のものは専用のものでなくても代用可能なものです。

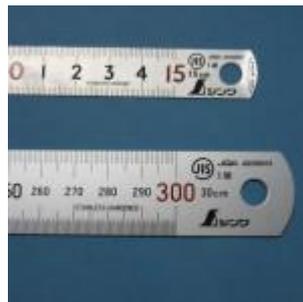
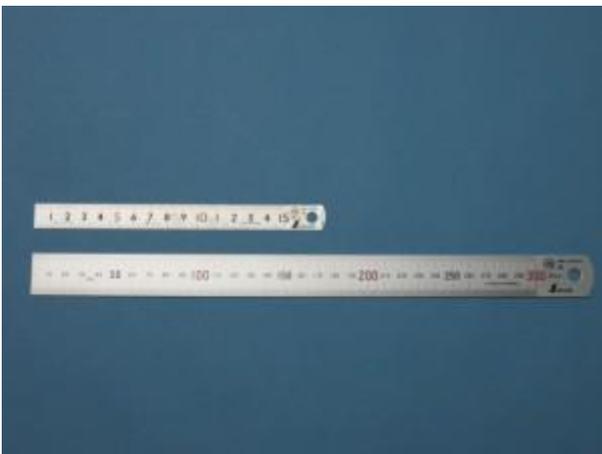
製本機

本文（ほんもん＝束ねた原稿のこと）を束ねて固定します。（写真は「[とじ助 A4 サイズ用](#)」です。本文の固定と作業台を兼ねた道具です。）



定規*

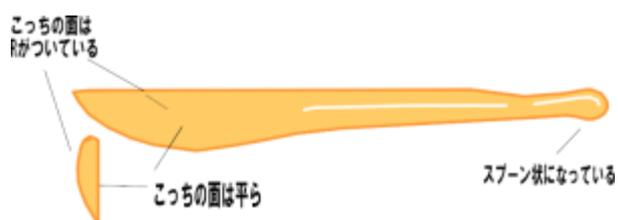
カッターをあてて紙を切ったり、束厚（原稿の厚さ）を測るときに使います。30センチの長いものと15センチの短いものの2本あると便利です。カッターを当てるので、金属のものの方が良いです。



折りヘラ

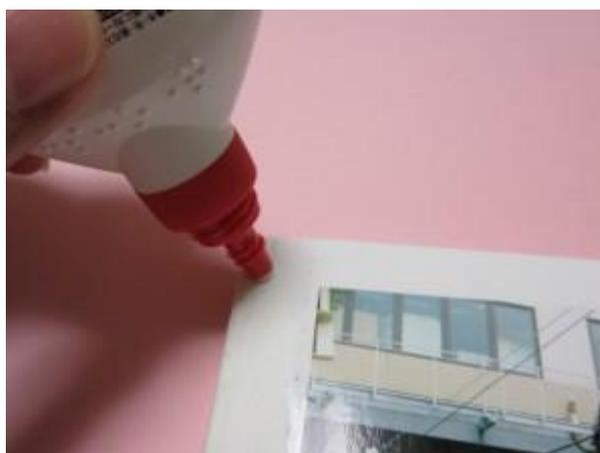
尖った先で紙に印をつけたり、紙の下に差し込んで折り目を立ち上げたり、折り目の上からこすって、折り目をきつくしたりします。

片面が平ら、もう一方の面が膨らんでいるものが便利です。



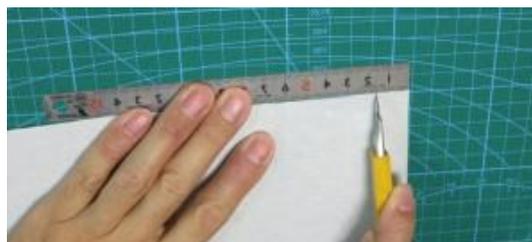
ボンド*

ホットメルトシートに補強和紙を仮止めするときに使います。また、表紙と本文を接着するときにも使います。速乾性のもののほうが作業がはかどります。



カッター・ハサミ*

紙やホットメルトシートを切るときに使います



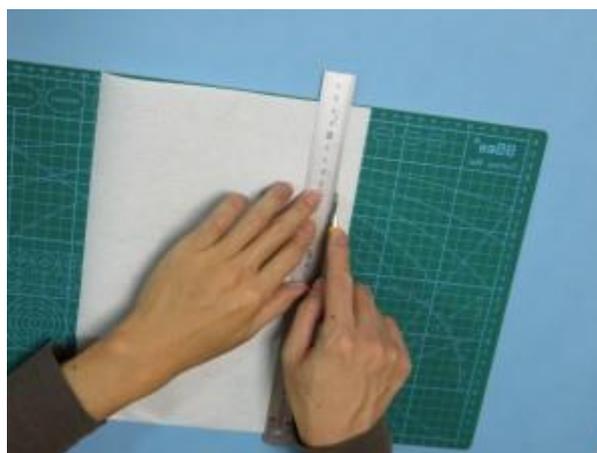
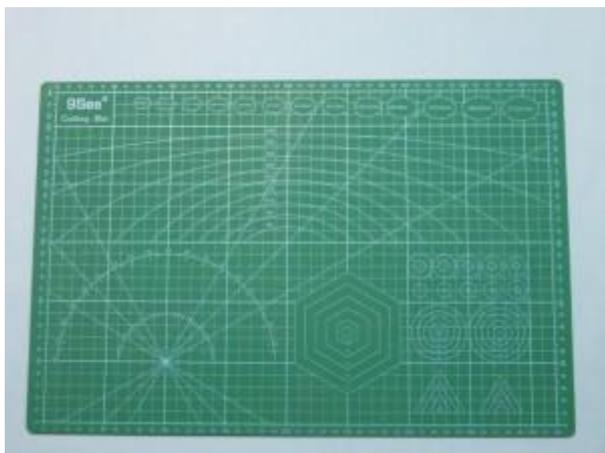
アイロン*

ホットメルトシートを溶かして本文の背を接着します。家事用のものでよいですが、本の背はさほど幅がないため、小さなもののほうがより使い勝手がよいです。



カッティングマット

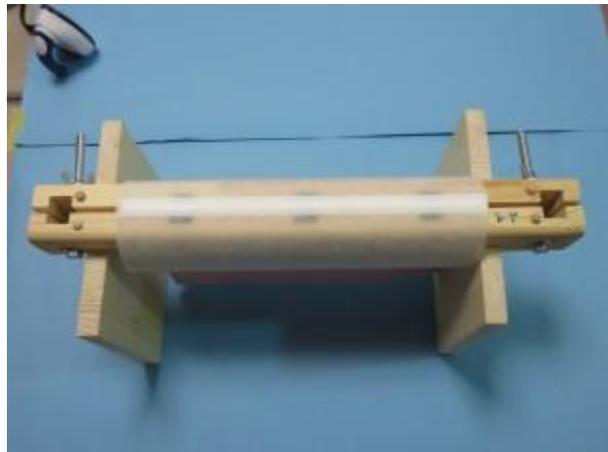
紙をカッターで切るときに下に敷きます。A3サイズ以上のものが使いやすいです。



シリコンシート（クッキングシート）*

アイロンをあてるときにホットメルトシートの上ののせます。両面にシリコンが塗布してありますので、アイロンにホットメルトがこびりつくのを防ぎます。

市販の料理用のクッキングシートでかまいません。



補強和紙

ホットメルトで背固めをするときに背に貼り付けて、接着強度を増すとともに背割れを防止する和紙です。

無線綴じでは、本文を糸でからげたりせずに、ホットメルトの接着力だけで綴じますので、接着面へのホットメルトの浸透が重要となります。

ホットメルトの浸透を助け、綴じた後に何度も本を開閉することで背割れが発生したり、ページの脱落が発生したりすることを防止するために接着時に貼り付けます。

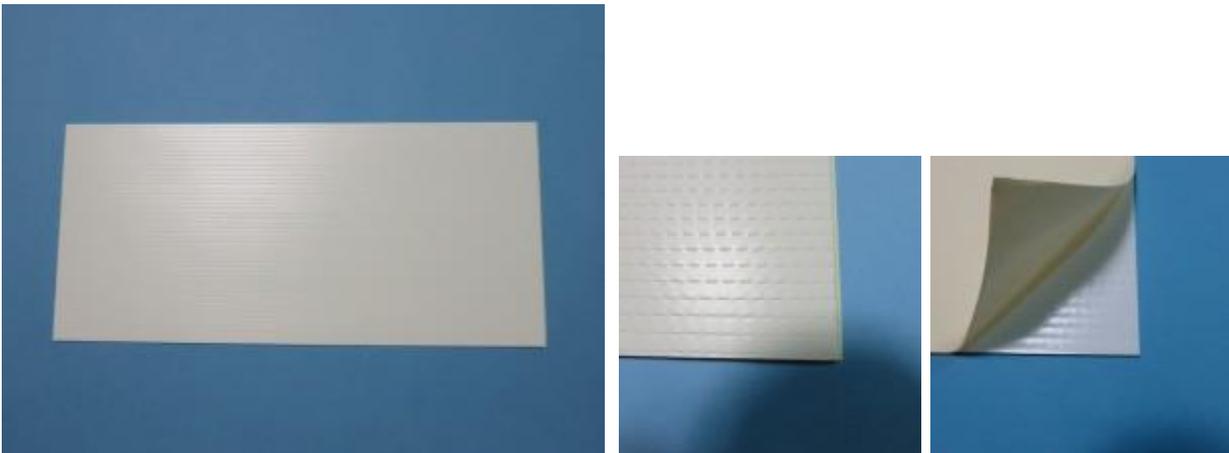


製本用ホットメルトシート

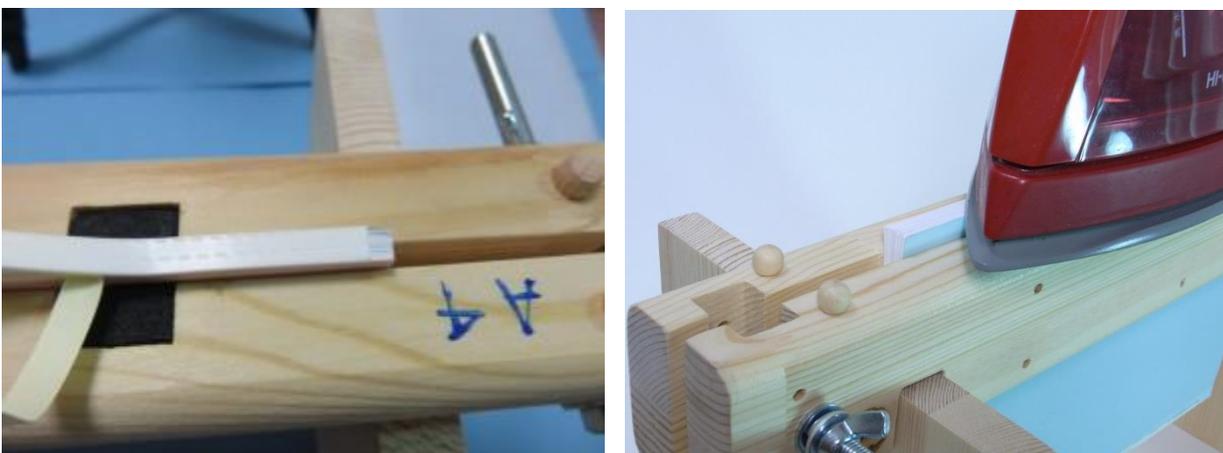
熱でとける板状（厚さ 0.8mm 程度）の樹脂シートです。170度程度で十分な粘着性を発揮しますので、アイロンで溶かして背を固めるのに使用します。一般のファッション誌やマンガ雑誌、文庫本などもこの糊（樹脂）で製本されています。

一旦溶けた糊は温度が下がると固まります。背固めはボンドで代用する場合がありますが、ボンドの場合は、ボンドがしっかり固まるまで数時間放置する必要があります。ホットメルトでしたら数分で固まりますので、これを使うことで、面倒な背の加工の工程が劇的に楽になり、製本のスピードが格段に早くなります。

リヒトラブ製のホットメルトシートは、裏面が粘着テープになっていて、あらかじめ背に貼ることで、ずれずにアイロンをあてることができます。



表面は5ミリ単位で点線がついており、裏側は剥離紙をはがすと粘着テープになっています。



スティックのり

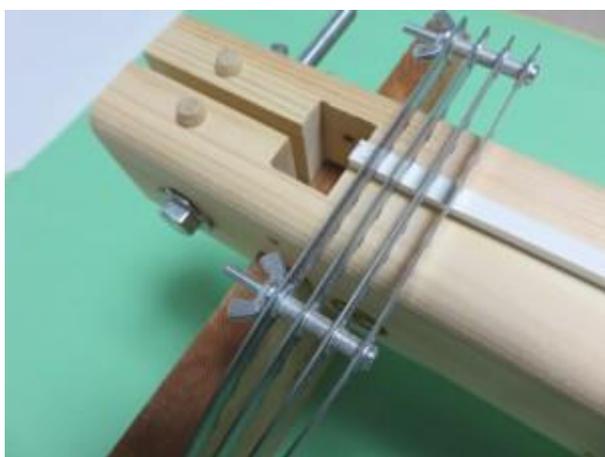
表紙と見返しを貼るときに使います。水性の糊でも良いですが、シワができる可能性があること、貼り直しが難しいことから、スティックのりをおすすめします。



金ノコ



背固めをする際に、ホットメルト（背糊）の接着面積を増やすために、背に溝を入れる工具です。右は4枚刃で一気に4本の溝が切れる「溝切り名人」です。溝切り工程が楽に短時間でできます。



溝切り名人

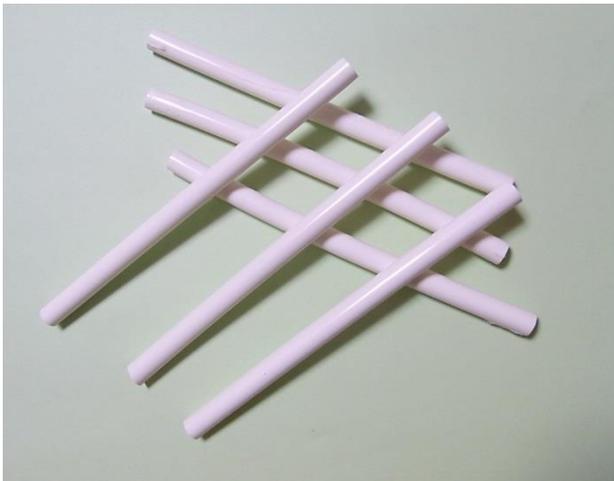
グルーガン

ホットメルトシートの代わりに、ホットメルトスティックを使用して背固めする際に使用します。厚みのない冊子を製本するときに**確実に**背にホットメルトをのせることができるので、かんたんに**多数の本**を作ることができます。



製本用ホットメルトスティック

グルーガンで製本する際に、グルーガンにセットするスティックです。



製本用ホットメルトチップ

シリコンシートで挟んでアイロンを掛けて平らな板状にすることで、自前でホットメルトシートを作ることができます。

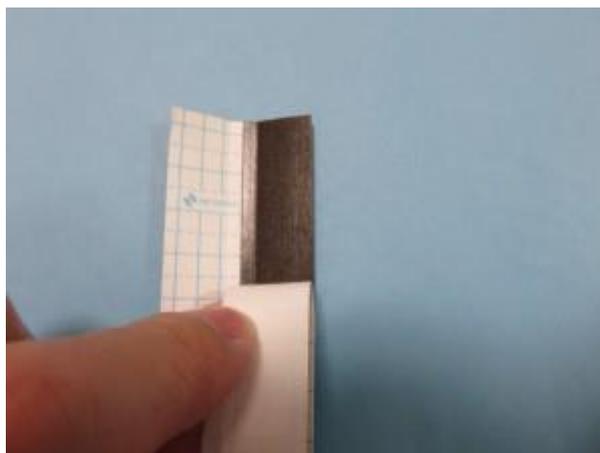


製本テープ

本文の背に貼って背を補強・保護します。また、装飾の役目もあります。

裏面は粘着面になっており剥離紙がついています。（剥離紙は中心で2等分されていて半分ずつはがせるようになっています）

ニチバンのものは13色もありますので、お好みの色を選ぶことができます。



本をつくる

◆入門編◆30分で完成！ホットメルトシートと製本テープを使った本の作り方 [50枚(100ページ)程度の冊子の製本方法]

初心者向け入門編として原稿50枚100ページ(6ミリ程度)の製本の方法を説明します。

最もシンプルなものを作るために、手に入りやすい材料で、なるべく工程を少なくすることを目指します。

手芸の本で紹介されている本の作り方は、**折り丁**(おりちょう=紙を折りたたんで作る、綴じる基本単位。これを複数作って綴じることで本の形にする)をつくって**糸綴じ**(折り丁を縫うように糸でつないでいくこと)をするものが多くありますが、この方法ですと、プリンターで印刷した原稿を製本するには、**ページの順番を事前に熟慮**する必要があり、綴じるときの手仕事としても**技術が必要**です。

そこで、ここでは、初心者でも簡単に製本できる**ホットメルト**と**製本テープ**を使った**無線綴じ**のやり方を紹介したいと思います。

もちろん100ページ以上厚さの原稿の製本もできますが、接着強度を増すために少し工程が増えます。その辺りは文中で随時説明を入れていきたいと思っています。

道具

まずは、作るのに必要な道具です。*印以外のものは専用のものでなくても代用可能なものです。たとえば、製本機は大型のクリップでも何とかできますし、カッティングマットは古雑誌や古新聞でも代用できます。ただし、専用のものを用意したほうが、より簡単に、きれいに仕上がります。

※各道具の詳細は11ページの「道具と材料」を参照してください。



- [製本機](#)
- 定規*
- [折りべら](#)
- ボンド*
- カッター・ハサミ*
- アイロン*

- カッティングマット
- [シリコンシート \(クッキングシート\) *](#)
- [ホットメルトシート \(リヒトラブ製 A4サイズ\)](#)

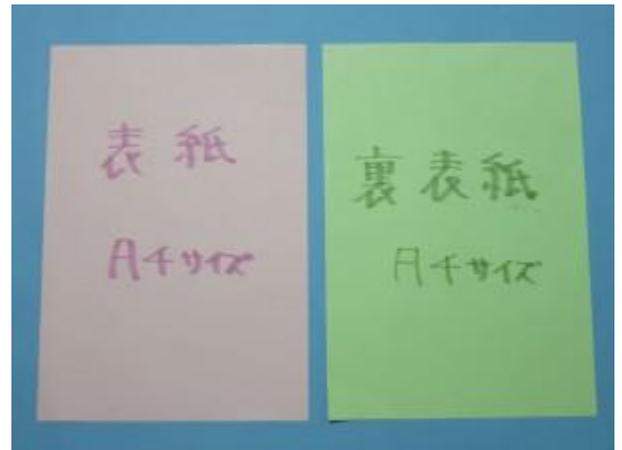
材料

- 原稿 (本文=ほんもん)
入手のしやすさと作業工程を減らすことを優先して A4 サイズのコピー用紙を使います。文章がある場合は、**事前に印刷**しておきます。



- 表紙・裏表紙
通常ですと、本文より少し厚手で丈夫な紙を使いますが、そうした紙は大抵が 4 つ切りなど A 系のサイズと異なるため、原稿に合わせた裁断が必要となります。そうした作業を省くため、ここでは色付き

の A4 コピー紙を使います。



- [補強和紙](#)
ホットメルトで背固めをするときに、背割れを防止するために背に貼り付けます。ここではあらかじめ A4 サイズに切ったものを使います。



- [製本テープ](#)
本文の背に貼って背を補強・保護します。

また、装飾の役目もあります。

ここでは、すでに A4 サイズに切られている 35 ミリ幅の黒いものを使います。

色については、ニチバンから出ているものは 13 色もありますのでお好きな色が選べます。



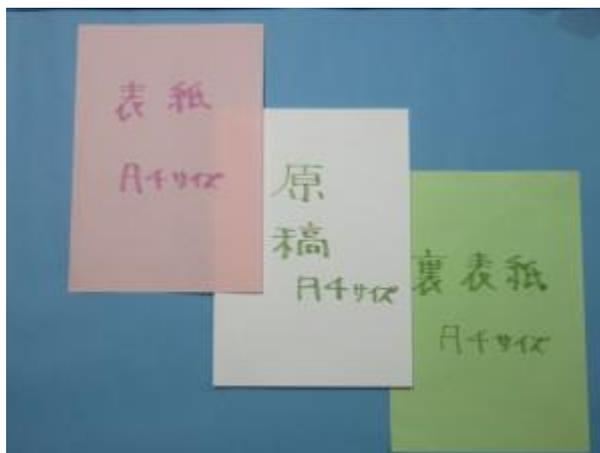
工程

道具と材料が揃ったところで、いざ、製作です。
大まかな作業工程は次のようになります。

1. 本文を固定する
2. ホットメルトシートと補強和紙をカットする
3. 背にアイロンをあてる
4. 平にアイロンをあてる
5. 製本テープを貼る
6. 製本テープにアイロンをあてる
7. 小口を裁断する

本文を固定する

本文を綴じるにはホットメルトで背を糊づけするのですが、その作業の前段階として、作業がしやすいように、ページを順序良く並べて、しっかりと製本機で固定します。



まずは、表紙→原稿→裏表紙の順に重ねます。
原稿は本になった時にスムーズに読み進められるように綴じ方向も考慮して序良く並べます。



右綴じ



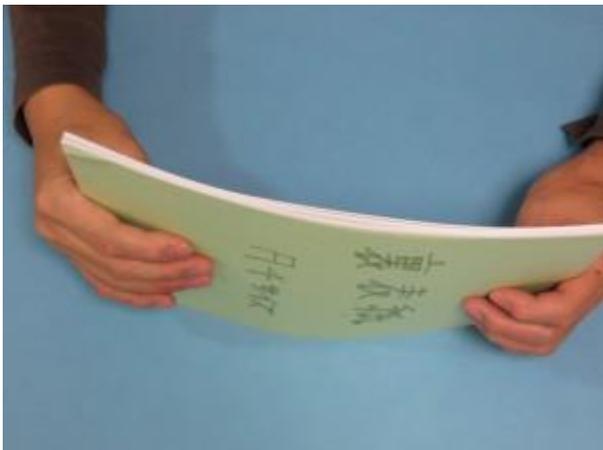
左綴じ

綴じ方向は、一般に本文が縦書なら右綴じ、横書きなら左綴じとなります。

ここでは、左綴じの製本を行います。



左綴じの場合はこのような重ね方になります。
次に、製本機に本文をセットしたときに天地と背を揃えやすくするために、紙に「風を入れる」という作業をします。これは、紙同士がくっついていて互いの摩擦で紙が揃いにくいので、紙と紙の間に空気をいれてやることを言います。



本文の端と端を両手でつまみます。



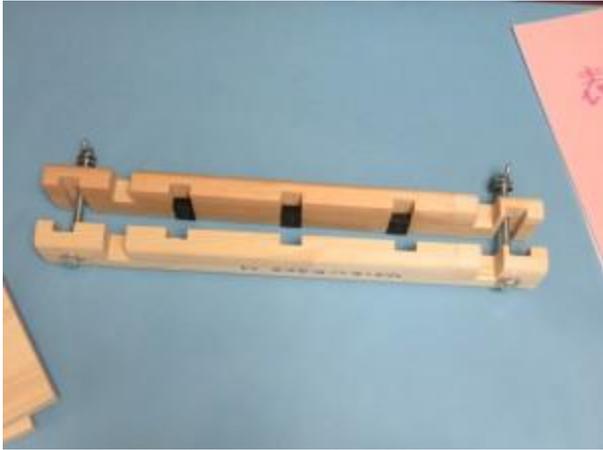
両手を内側に絞ります。



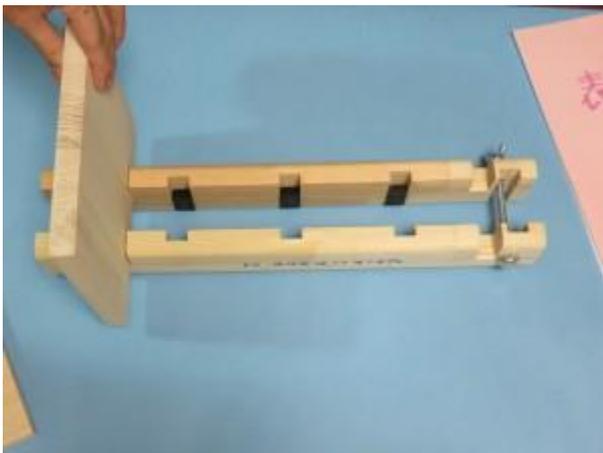
ここが膨らんで空気が入ることで紙が揃えやすくなる

絞った手をパッと外側に開きます。
すると紙の中心部分が膨らんで紙と紙の間に空気が入ります。

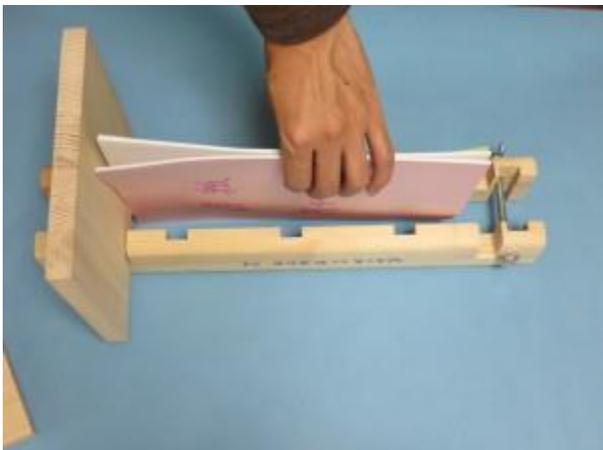
風を入れ終わったら本文を固定します。



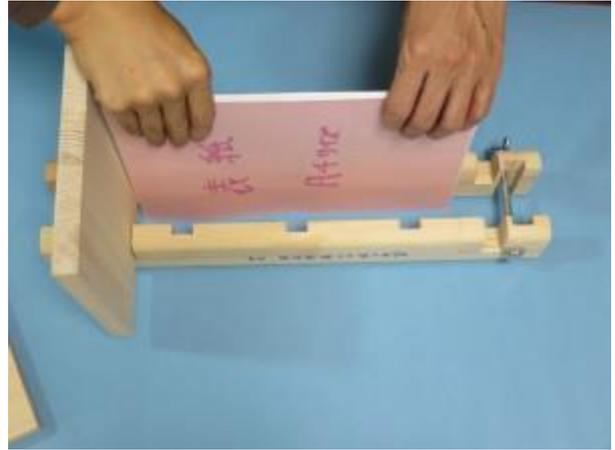
製本機のネジをゆるめて逆さに置き、原稿が入る幅に開きます。



片側の溝に足板を差し込みます



本文を製本機の中に差し込みます

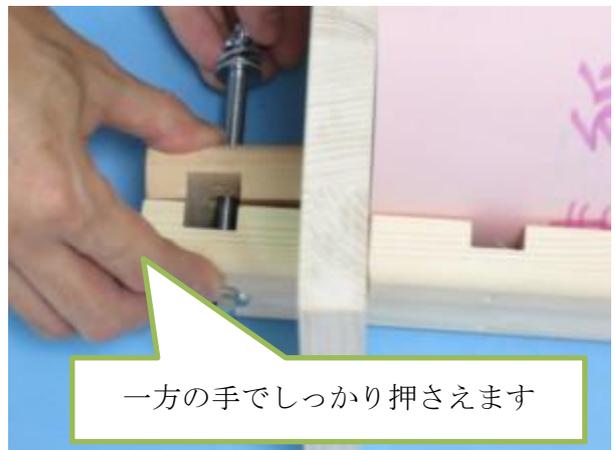


上からトントンと落とすようにして背をそろえます



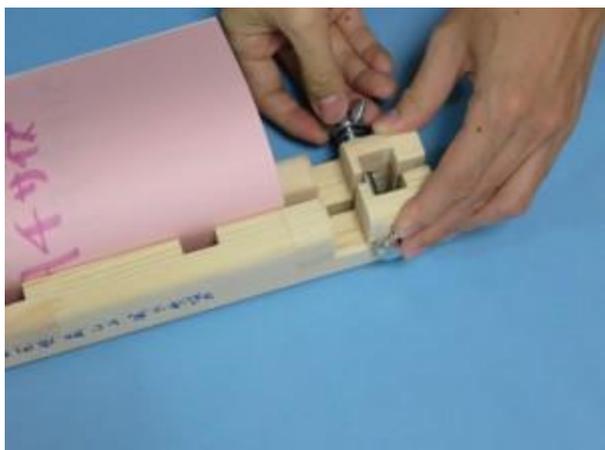
ここを横からトントンと押します

横から足板に向かってトントン押すようにして、天地をそろえます。

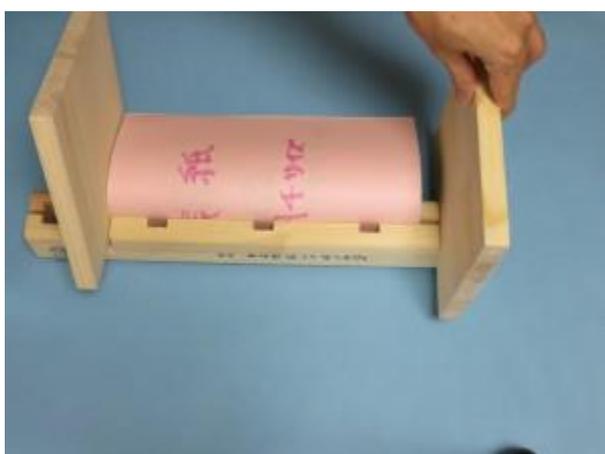


一方の手でしっかり押さえます

片手で締め板をしっかり押さえて、もう片方の手でネジを締めます。



同様に反対側も、片手でしっかり押さえてもう片方の手でネジを締めます。



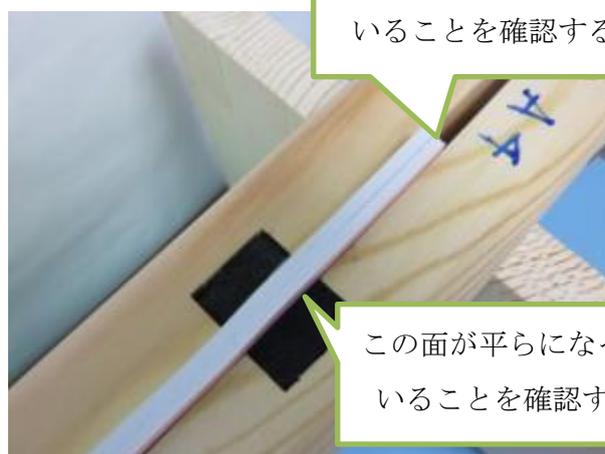
もう一方の足板を溝に差し込みます。



足板を押さえながら製本機ごとひっくり返します。



このように原稿が固定され、自立した作業台となります。



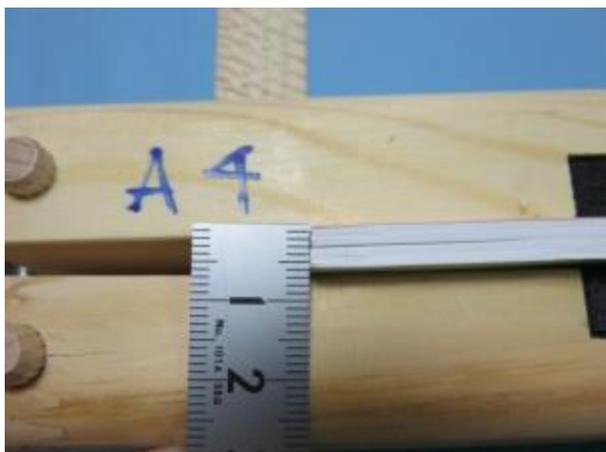
背の部分がでこぼこしておらず、きれいにそろっていることを確認します。

揃っていないようなら、再び、ネジをゆるめて先ほどの手順で原稿をはさみます。

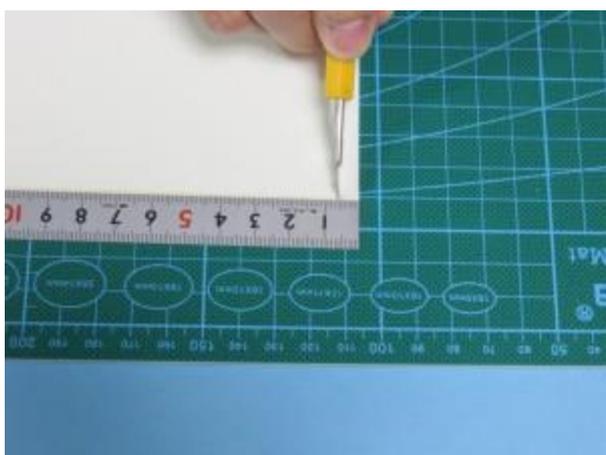
ホットメルトシートと補強和紙をカットする

本文の厚さ（束厚＝つかあつ）を測って、そのサイズでホットメルトシートと補強和紙をカットします。

※本の厚さが6ミリより厚い場合は、背に溝を入れて接着強度を増す必要があります。その際は50ページの「ハードカバーの本の作り方ー溝切り」を参考にしてください。



束厚をはかります。6ミリです。



ホットメルトシートの端から6ミリのところに
カッターで印をつけます。

逆の端にも同様に印をつけます。

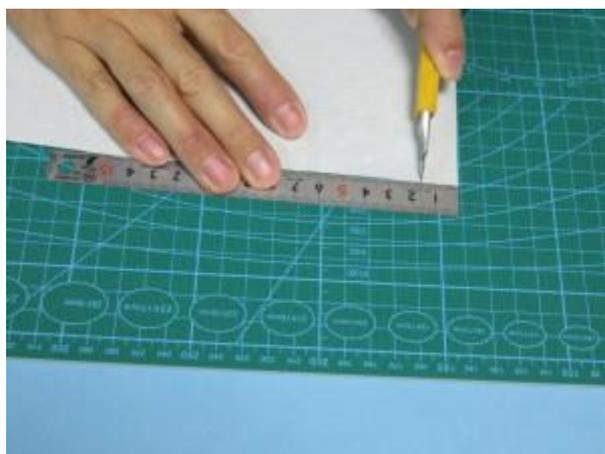


印に定規をあてて、カッターで切り落とします。



6ミリ幅のホットメルトシートがカット出来ま
した。

※今回はA4用のホットメルトシートを使っ
ているので長さの方はカットしていません。A4以
外の本文の場合は、天地（背）の長さに合わせ
て適宜カットしてください。



次に、補強和紙をカットします。平側に5ミリ
回し込みたいので、

左回り込み（5ミリ）+束厚（6ミリ）+右回
り込み（5ミリ）=16で

16ミリの幅の短冊を作ります。

補強和紙の端から16ミリのところにカッター
で印をつけます。

逆の端にも同様に印をつけます。

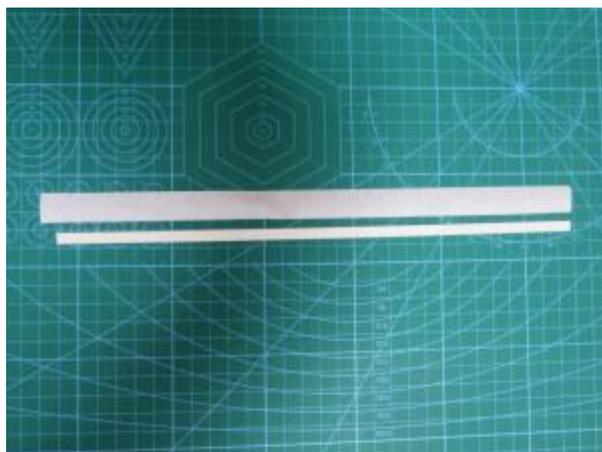


印に定規をあてて、カッターで切り落とします。



16ミリ幅の短冊が出来ました。

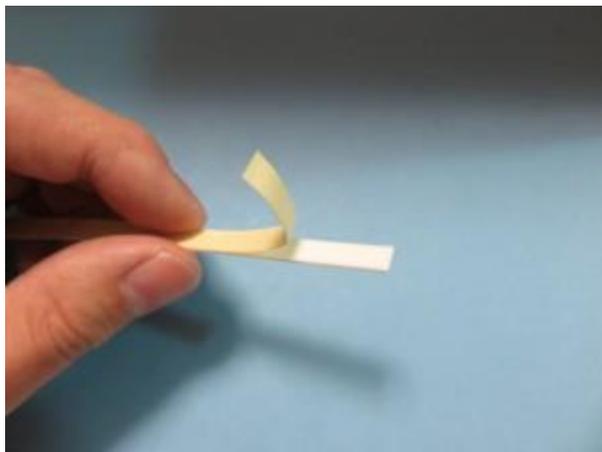
※今回は、A4サイズの補強和紙を使っているの
で、長さの方はカットしていません。A4以外の
本文の場合は、天地（背）の長さに合わせて適
宜カットして



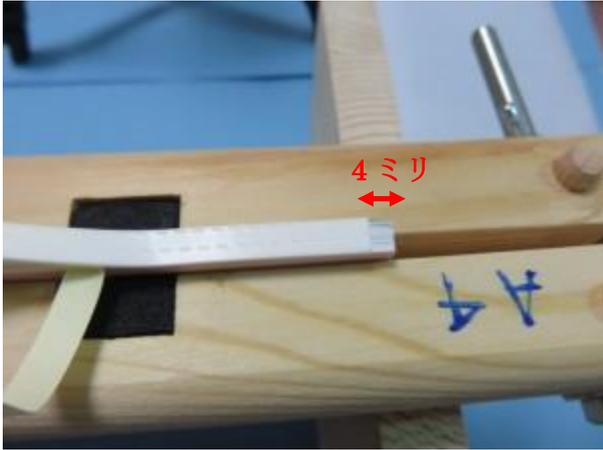
これで6ミリ幅のホットメルトシートと、16
ミリ幅の補強和紙ができました。

ホットメルトの長さが少し短いのは、**アイロ
ンの熱で溶けた時に広がる**のでそれを考慮した長
さです。

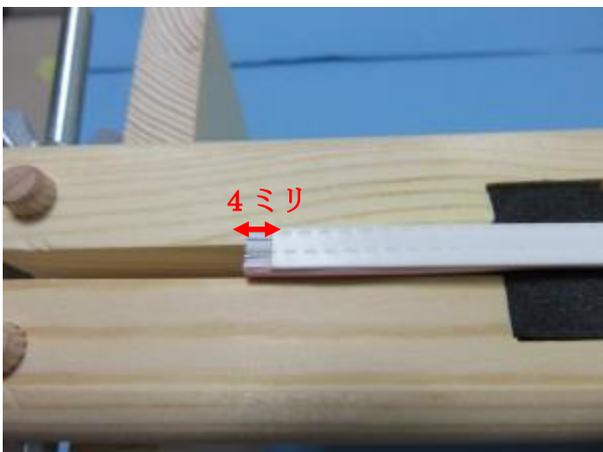
背にアイロンをあてる



ホットメルトシート裏の剥離紙を剥がします。

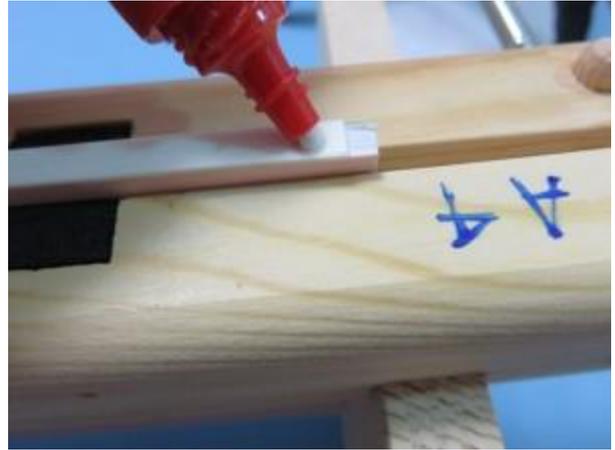


背の端に貼り付けます。このとき、端から4ミリ離れたところから貼り始めます。（4ミリ離す理由は、ホットメルトシートは熱をかけると溶けて広がるためです。）



貼り終わった端も4ミリ隙間ができます。これで正しいです。

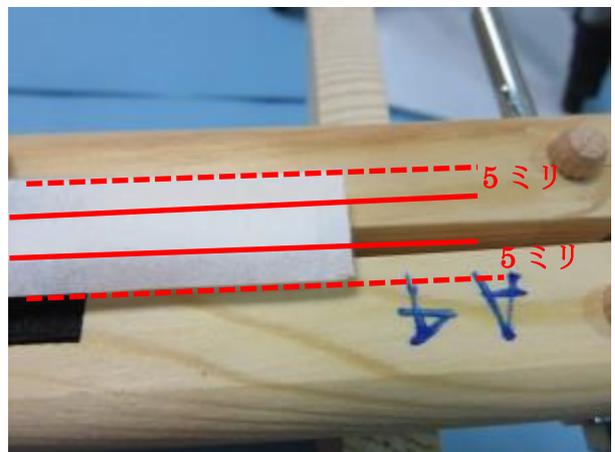
左右は背からはみ出していないことを確認します。



補強和紙を仮止めするためにボンドを点を打つように塗ります。



5センチ程度の間隔でボンドで点を打ちます。



先ほど切り出した和紙を、背を中心として左右5ミリはみ出るように貼り付けます。



このようになります。



シリコンシートを背の長さより長めに切ります。



背に乗せます。



アイロンの温度設定を170度程度（中～高）に温めておいて、シリコンシートの上から背にあてます。

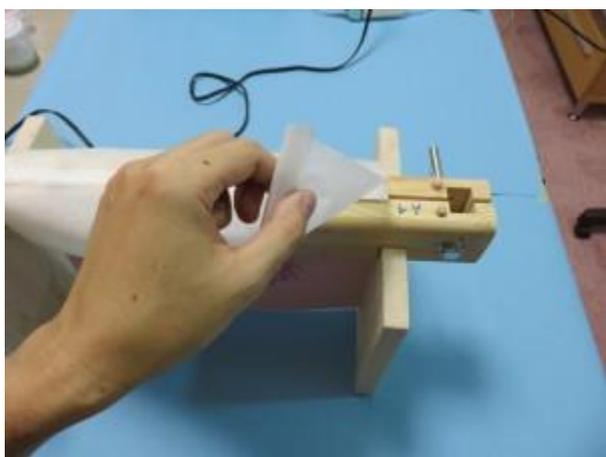
しばらくすると、ホットメルトが溶け始めます。少し溶けて山が潰れたと思ったら、移動します。



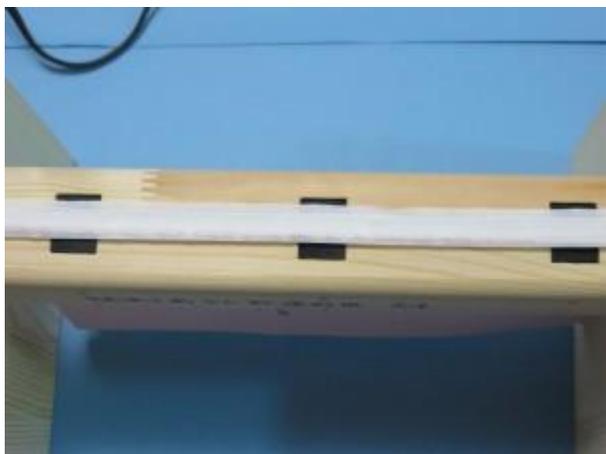
順に移動してホットメルトを溶かしていき、ホットメルトの山がすべてつぶれたら、今度は洋服にアイロンをかけるように左右にすべらせて、最終的には、まっ平らになるようにします。（実際には、補強和紙があるのでまっ平らにはなりません。そういう感覚で。）



このまま冷めてホットメルトが固まるまでしばらく置きます。（3分程度）



冷めたらシリコンシートを外します。



補強和紙が羽のようになっていますが、今のところこれで正しいです。

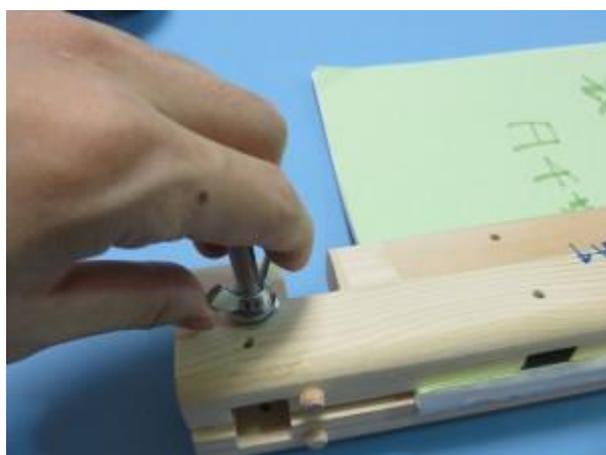
平にアイロンをあてる



製本機から両方の足板を外します。



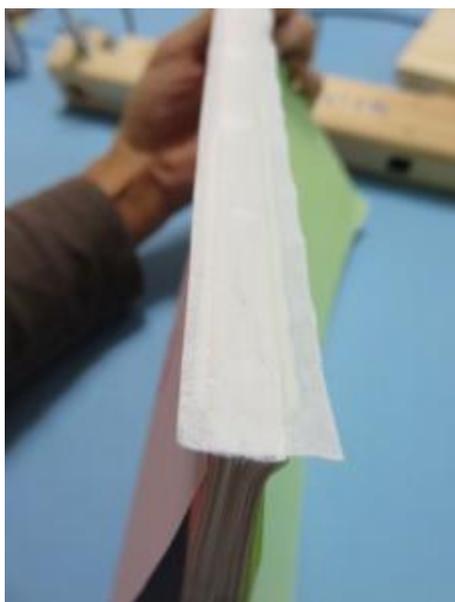
片側のネジをゆるめます。



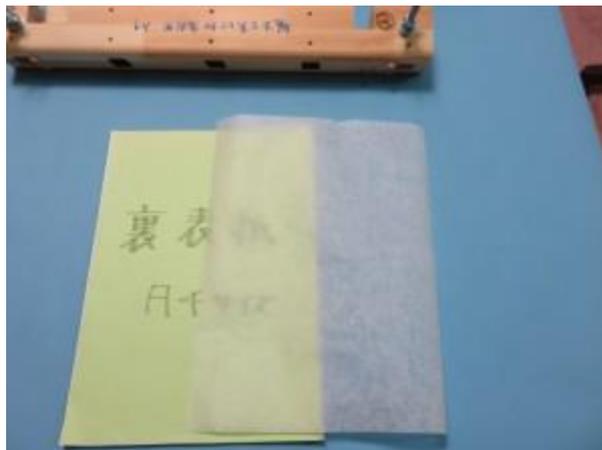
もう一方のネジをゆるめます。



本を抜きます。



背はこのように補強和紙が羽のようになっています。



平を上にして置き、その上にシリコンシートをかぶせます。



背に横からアイロンをあてます。



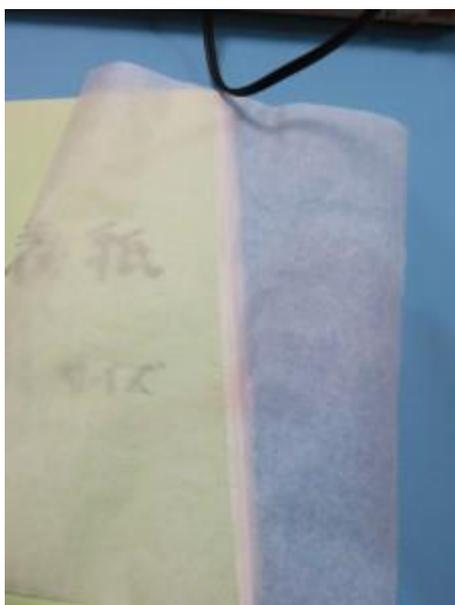
そのまま、傾けます。



さらに平側に倒します。



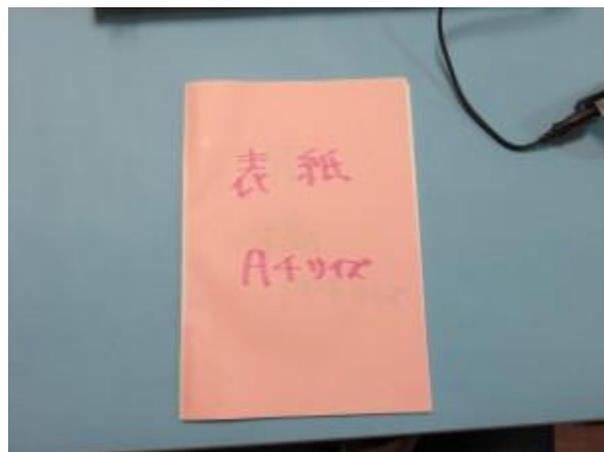
しばらく平にアイロンをあてます。



同様にして、補強和紙全体を背から平に回しこ

んで接着します。

表面、裏面とも行います。

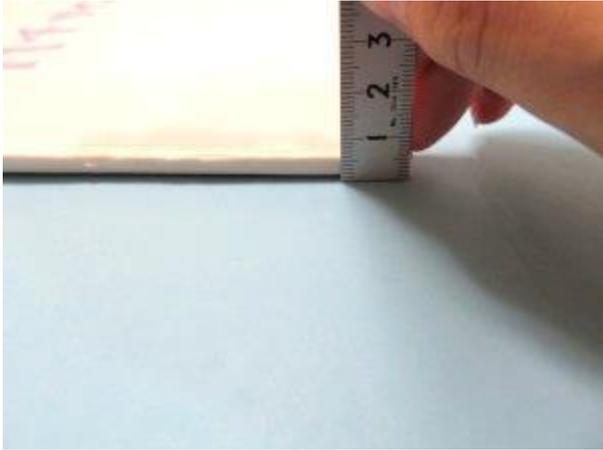


これで本の形になりました。もう各ページがばらばらになることはありません。

製本テープを貼る

背の補強・保護と装飾のために製本テープを貼ります。

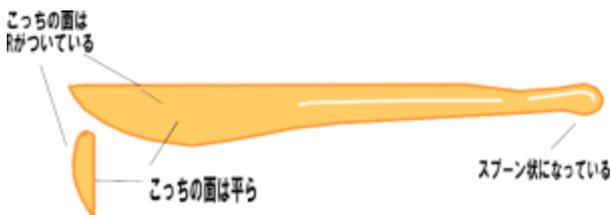
※厚い本を作る場合には、開いた時に背割れが発生しないように厚めの紙で背を補強する必要があります。64 ページの「ハードカバーの本の作り方ー表紙の作成」または、40 ページの「グルーガンでくるみ製本ー表紙を作る」を参考に、して表紙を作ってください。



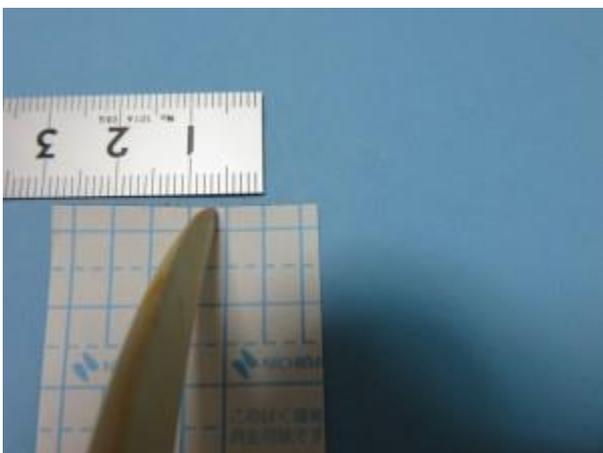
まずは、厚さを測ります。表紙の紙が薄いので、束厚と同じ**6ミリ**でした。

ここから折りべらを使います。折り木べらは先が尖っていて側面の片面は平ら、片面は曲面になっています。尖ったところで紙にすじをつけたり、曲面で折り目をつけたりします。

※折りべらがなくてもボンドについてくるへらなど代用品でも作業できます。

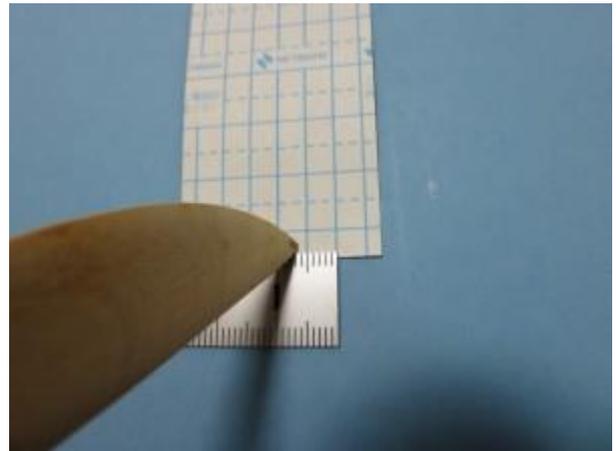


折へらの形

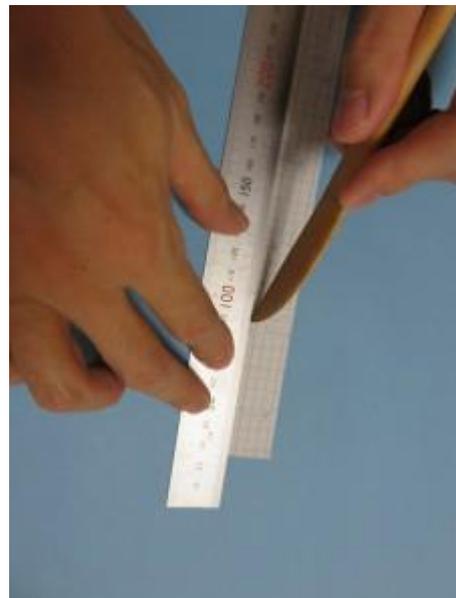


製本テープの中心（剥離紙の切れ目）から**3ミ**

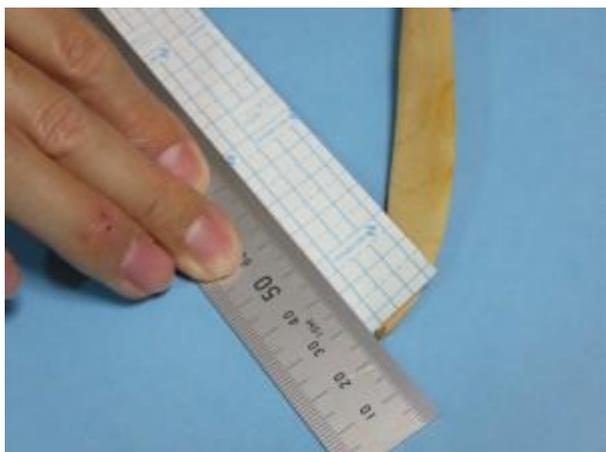
リ（束厚の半分）の端にへらの尖った方で印をつけます。



同様に、反対側の端にも印をつけます。



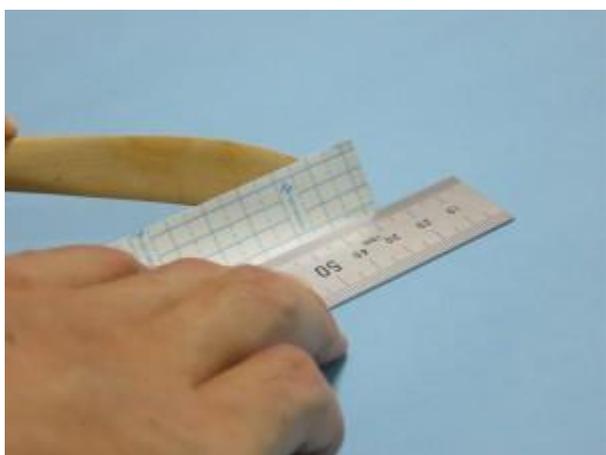
印に定規をあてて、へらの平らな面の尖った方で定規に沿ってすじを付けます。



すじがついたら、定規はあてたままで、ヘラの平らな方を製本テープの下に差し入れて、逆側から筋を入れます。



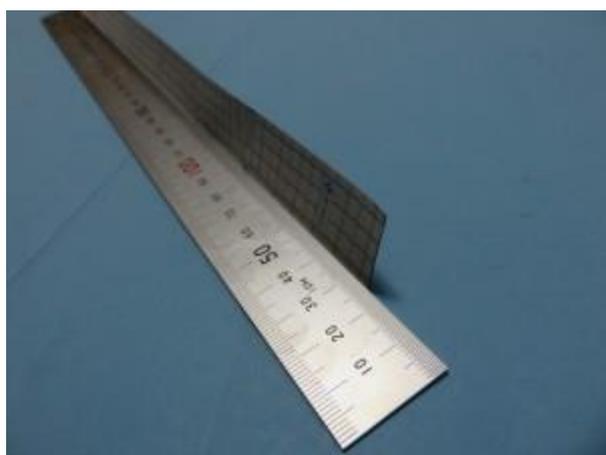
何度か差し入れながら、ヘラを立てるようにしていきます。



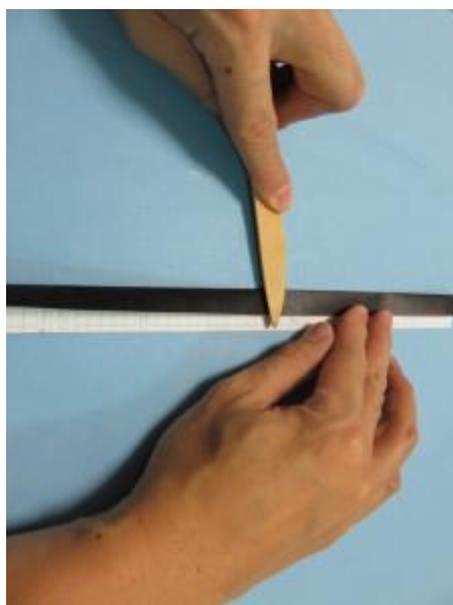
逆側から見たところです。



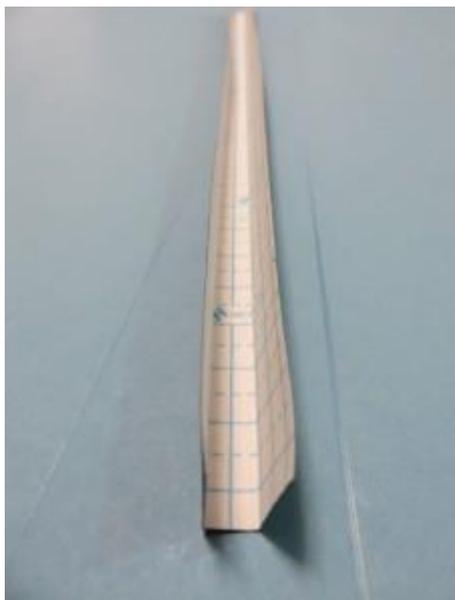
だんだん垂直にします。



このようにします。



定規を外して、反対側に折り曲げ、ヘラの腹(膨らんでいる方)でこすって折り目を強くします。



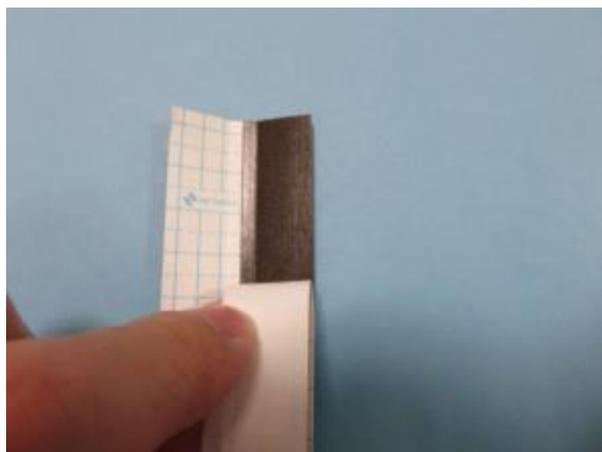
逆側も同様にして、コの字型にします。



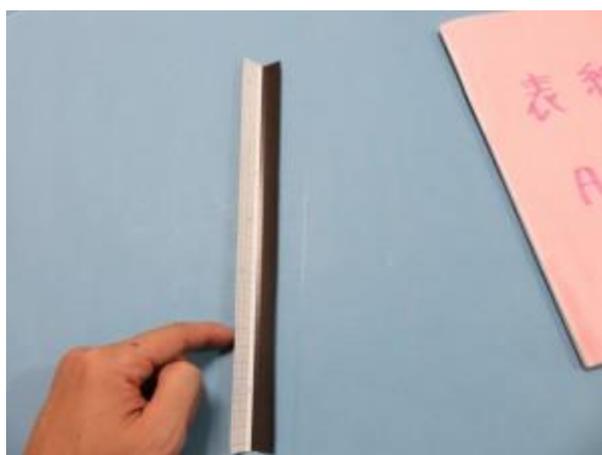
表から見るとこのようになります。

※今回は、A4の長さにあらかじめカットされた製本テープを使っていますので、長さの方はカットしていません。A4以外の本文の場合は、天地（背）の長さに合わせて適宜カットしてください。

本に貼り付けます。



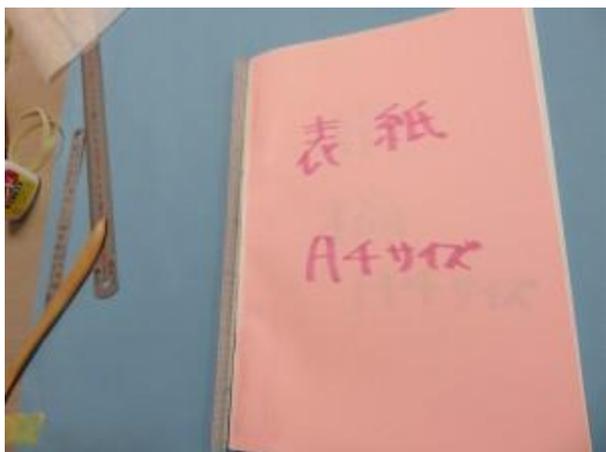
製本テープの剥離紙の半分を剥がします。



片側をはがすとこのようになります。



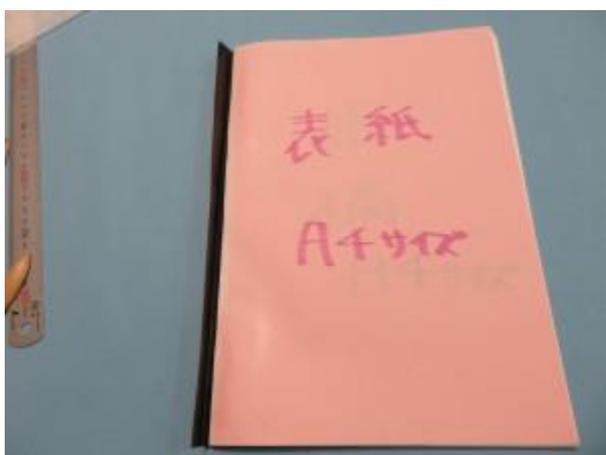
角に先ほど折った折り目を合わせるように丁寧に貼り付けます。



片面を貼り終わりました。



残りの剥離紙を剥がします。



全てはがすところのようになります。

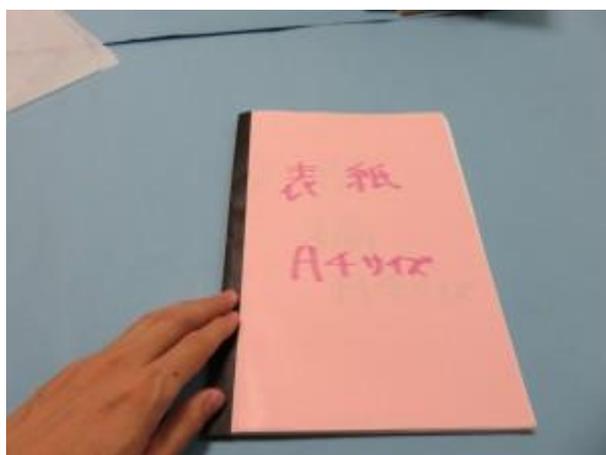


背に押し付けるようにしながら、貼り付けます。

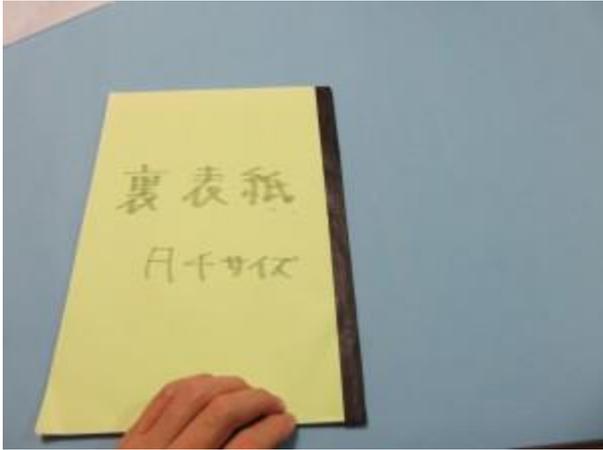


表紙側に回しこんで上から押し付けるようにしっかり貼ります。

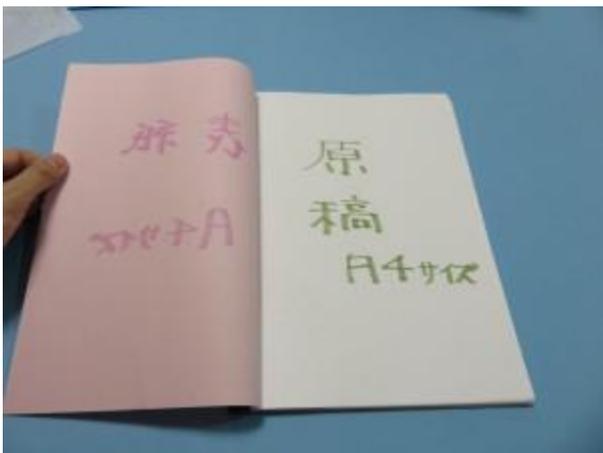
最後に、全体にしっかり貼り付けたら完成です。



表紙



裏表紙



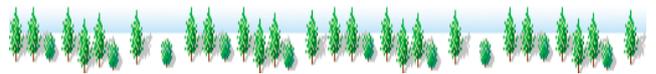
表紙をめくったところ



本文



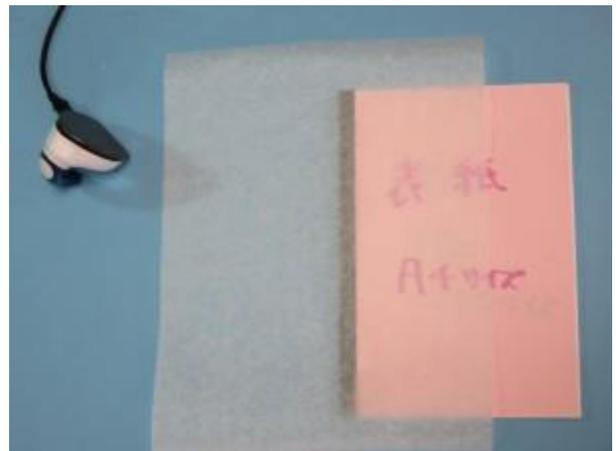
最終ページ



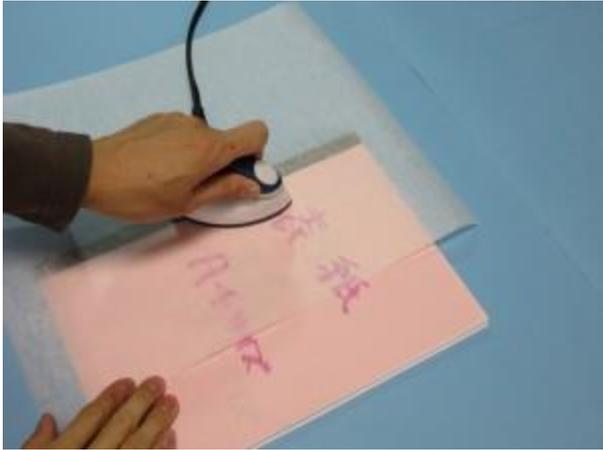
ここまでで、本としては完成ですが、さらにひと手間かけると見栄えがぐっと良くなります。

製本テープにアイロンをあてる

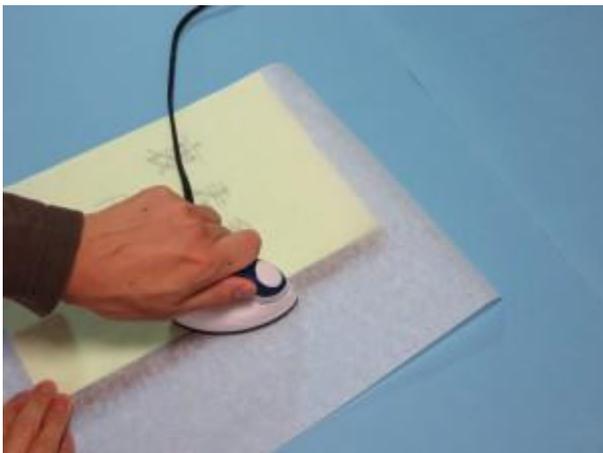
製本テープを貼ったところがデコボコしていたり、背の角が立っていない時に、製本テープを貼ったところに再度アイロンをあてます。



製本テープ部分にシリコンシートをのせます。



平側からと背側から角を出すようにアイロンをあてます。



裏側も同様にアイロンをあてます。



角が出来ました。

小口を裁断する（化粧断ちする）



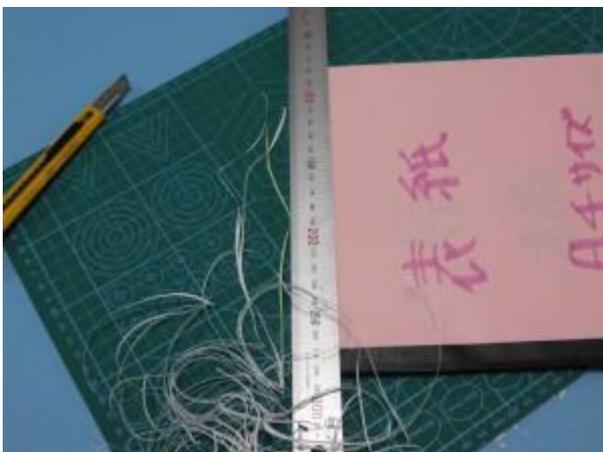
すべての用紙を A4 サイズで統一して製本してもこのように小口が揃わない事があります。



小口に定規をあてて数ミリをカッターで切り落としてそろえます。



一度に切ろうとすると余計な力が入ってきれいに切断できないことがあります。定規は動かさないようにして、**軽い力で根気よく何度もカッターを滑らす**ことで徐々に切れてきます。



天、地も揃っていないようなら同様に切り落とします。



小口がきっちり揃いました。

これで、さらに立派な本になりました。

◆初級編◆グルーガンを使った本の作り方 [30枚(60ページ)程度の小冊子の製本方法]



30枚(60ページ)程度の小冊をグルーガン(ホットメルトガン)を使って製本する方法です。グルーガンを使って製本するメリットは、薄い冊子の背に確実にホットメルトをのせることができます。

ホットメルトシートで製本する場合だと、シートをひも状に切って背にのせて、背からずれないようにアイロンをあてる必要がありますが、グルーガンなら、熱で溶けた状態でホットメルトをのせることができますので、背からはみ出すことはありません。

また、ホットメルトシートを切ったり貼ったりする手間がかかりませんので、手返しよく短時間に見栄えのよい本をたくさん作ることができます。

※ここではグルーガンを使って背固めをしていますが、ホットメルトシートを使っても同様のことができます。ホットメルトシートを使う場合には読み替えて作業をしてください。

道具・材料

※各道具の詳細は11ページの「道具と材料」を参照してください。

- 原稿
- 表紙
- 製本機
- [グルーガン](#) (高温タイプ こて先が170度程度となるもの)
- [製本用ホットメルトスティック](#) (グルースティック)
- 定規 (背の厚みを測ったり、表紙を折るため)
- アイロン (背糊を溶かして接着するため)
- [シリコンシート \(クッキングシート\)](#)
- てぶくろ (火傷防止のため)
- [折りべら](#) (表紙を折るときに使います)
- 裁断機 (カッターでも代用できます)



グルーガン製本に必要なもの

表紙を作る

「原稿の倍のサイズ+背の厚さ+余白」サイズの用紙を表紙として用意します。原稿よりも少し厚い紙のほうが見栄えがします。余白は最後に切り落とすので原稿より大きければ、余白の長短は問いません。



表紙と原稿のサイズ比

表紙を半分に折って、折りべらのおしり（スプーン状になっている部分）でしごいて折り目をつけます。きっちり折り目をつけると、本になった時に背の角がピシッとします。



原稿を半分に折ります



折りべらのおしりで折り目をつけます

次に、背の幅を決めるために、定規やノギスで原稿の厚みを測ります。



原稿の厚みを測ります

厚みがわかったら、先ほど折り目をつけた線から厚み分離れた位置に定規を当てます。折りべらの平らな面を定規にあて、とがった方の先で定規に沿って、こすって線をつけます。

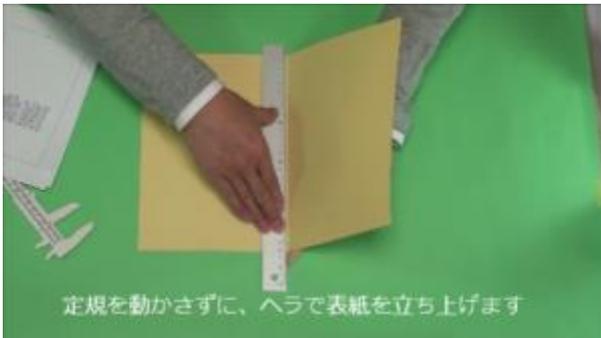


定規を当てて線を引きます。

定規を当てたままでヘラの平らなほうを下にして、紙の下に差し入れます。

そして定規にそって手前に引きます。すると、ヘラの膨らみで紙が立ち上がります。

少しずつヘラの角度を立てて手前に引くのを繰り返して、表紙が直角に立つまで繰り返します。



定規を動かさずにヘラで表紙を立ち上げます

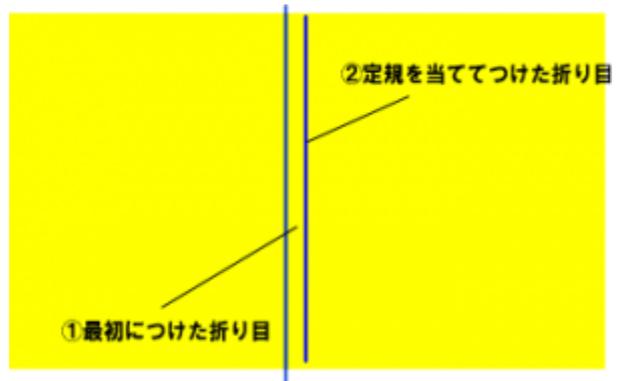
表紙が立ったら、定規を外して、今作った折り目を手で折ります。ヘラでこすって印がつけてあるので簡単に折れるはずです。

折ったら、ヘラのおしりでしごいて折り目を強くします。



定規を外してヘラのおしりで折り目をつけます

折り目は下図のように2本になっています。



折り目はこのようになります

背をのりづけする

表紙と原稿を下図のように重ねます。



表紙と原稿の重ね方



表紙と原稿の重ね方 (写真)

次に製本機に重ねた原稿と表紙を差し込んで固定します。

このとき原稿の天地をなるべく揃えるようにします。ただし天と地は最終的には切り落とします(化粧断ち)ので、さほど神経質になる必要はありません。



表紙と原稿を重ねて製本機に挟んで固定します



はさんだ状態

グルーガンにホットメルトスティックをセットして、こて先が温まって、こて内部でホットメルトが溶けるまで5分ほど待ちます。



グルーガンにホットメルトスティックをセットします

やけど防止のために手袋をして、グルーガンの引き金を引くとホットメルトの溶けたものが、こて先から出るのを確認します。(シリコンシートに出してみるといいです)

確認できたら、グルーガンで背にホットメルトをのせていきます。あとで、アイロンを当てて平らにしますので、山になるようにのせて構いません。(写真を参考にしてください。)



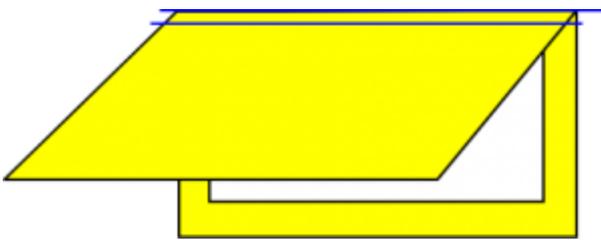
グルーガンで背にホットメルトをのせていきます。



このくらいたっぷりと載せます

アイロンをあてる

いったん製本機から原稿を外して、下の図のように原稿をくるむように表紙を折り返します。



原稿をくるむように折り返します

そして、折り返した表紙を外にだすようにして原稿を製本機で固定します。



折り返した表紙を外に出して製本機で固定します



固定したところです

固定できたら、シリコンシートをのせます。そして、背にアイロンを当ててホットメルトを溶かして平らにします（アイロンの温度は170-180度程度 中から高くらいです）。このとき片手でアイロンを操作して、もう片方の手は外に出した表紙を下に引くようにしてぴんと張ります。こうすると角がピシっとして糊が付きま

こちらの手で表紙を下に引くようにする



シリコンシートをのせてアイロンをあてます 糊が固まった頃を見計らって、製本機から原稿を外して下に置きます。膨らんでいる方の側面（平）にシリコンシートをのせてアイロンをあてます。平らになったら、裏返して同様にアイロンを当てます。どちらの面も平らになったか確認しながら繰り返します。



膨らんでいる方の面にアイロンを当てます

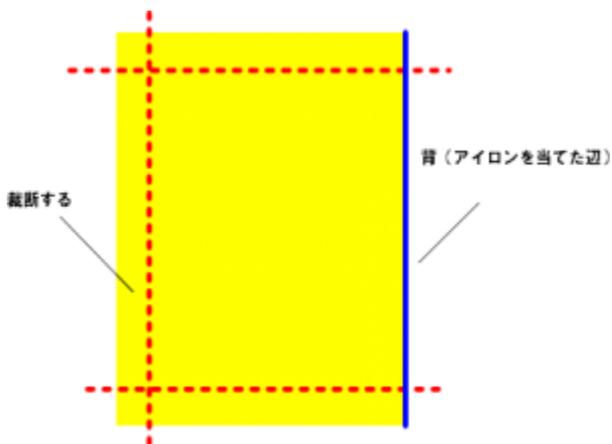
アイロンがけが終わって、糊が冷えて固まったら、出来具合を確認します。

- 天、地から覗いてみて、背にきちんと糊がのっているか
- 表紙の見返し側と原稿がちゃんとくっついているか
- 開いてみて割れてしまわないか

を確認します。うまく行っていないようなら再度アイロンをあてます。

裁断する（化粧断ち）

下図のように余白となっている赤線の3辺を切り落とします。裁断機（写真ではディスクカッターを使っています）で切り落とすと断面が綺麗になりますが、なければカッターで数回に分けて切り落とします。



3辺を切り落とします



裁断機で一気に切り落とします

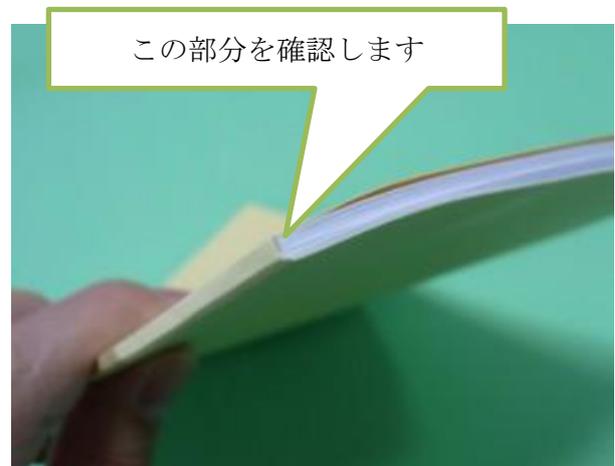
完成

これで本の形になりました。



本の完成です

最後にきちんと接着されているか再確認します。



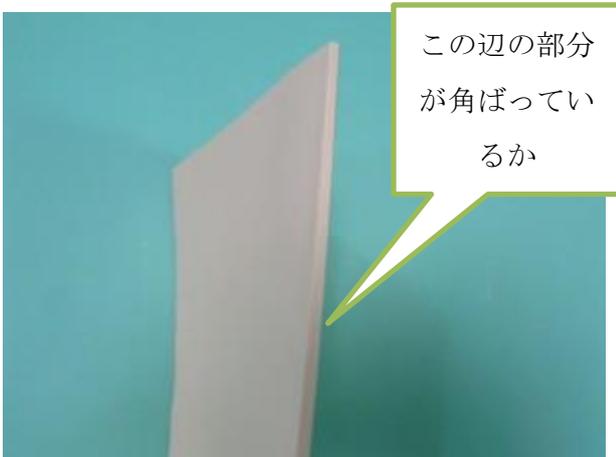
背にホットメルトが回っているか？



表紙と原稿がきちんとなついているか？



大きく開いても割れないか？



背のエッジは出ているか？

うまくできていなかった時は、補修できるようなら再度アイロンをあてて補修します。

補修しきれないようなら、一旦アイロンをあてて表紙を取り外してから、再度グルーガンでホットメルトをのせて再チャレンジしてみてください。

◆中級編◆ホットメルトシートと製本テープを使ったハードカバーの本（写真集）の作り方 [プリンター印刷した写真の製本方法]

ハードカバーの本というと、少し敷居が高い感じがしますが、ホットメルトと製本テープを上手に使うことができれば、表現の幅がぐっと広がりますのでアイデア次第でオリジナルの装飾を施した本を作ることができます。

これができれば、表現の幅がぐっと広がりますのでアイデア次第でオリジナルの装飾を施した本を作ることができます。

ここではインクジェットプリンターで印刷した両面写真紙を製本してフォトアルバム（写真集）を作ってみます。

写真集ですので、表紙には厚くてしっかりした紙を使用して、何度も閉じたり開いたりしても壊れないように強度にも気を配って製作します。

※コピー用紙に印刷した自作の原稿や雑誌の合本なども同じ作り方で出来ますので、適宜読み替えていただければと思います。



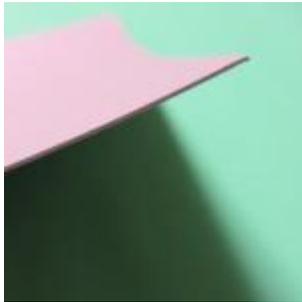
完成した写真集（タイトルをつけたり表紙カバーをつけていないので、少し寂しいですが、アイデア次第でどのようにも装飾できます）

道具

まずは、作るのに必要な道具です。*印以外のもは専用のものでなくても代用可能なものです。たとえば、製本機は大型のクリップでも何とかできますし、カッティングマットは古雑誌や古新聞でも代用できます。ただし、専用のものを用意したほうが、より簡単に、きれいに仕上がります。

※各道具の詳細は 11 ページの「道具と材料」を参照してください。

本文 (A4)よりも少し大きなサイズの表紙としますので、 美濃判 (B4 綴じ用) (273 × 395mm) を 2 枚使いました。



板目紙の厚さ

- 画用紙

表紙と本文を繋ぐ役割をする見返しとして使います。

表紙につく部分が「きき紙」、本文につく部分が「遊び」となるので本文 (A4) の倍のサイズ (A3) が必要です。

今回は四つ切 (392mm × 542mm) を使用します。



画用紙 (厚さ)

- [補強和紙](#)
- [ホットメルトシート \(リヒトラブ製 A4 サイズ\)](#)
- [製本テープ](#)

表紙の背に貼ります。表紙を構成するパーツは、表表紙、裏表紙、背の3面があるのですが、それらをつなぐために使用します。本格的な製本では表紙の3パーツをクロスでくるんだりしますが、かなり高度な技術が必要ですので、手軽さを重視して製本テープを使用します。

色は「パステルブルー」で 35mm 幅を選択

しました。



工程

道具と材料が揃ったところで、いざ、製作です。
大まかな作業工程は次のようになります。

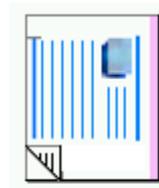
- 原稿の作成
- 溝切り
- 綴じ
- 見返しの作成
- 表紙の作成
- 表紙貼り
- 見返しの糊入れ

原稿の作成



本文となる原稿を印刷して、本になった時にスムーズに読み進められるように順序良く並べます。

印刷する前に決めておかなければならないのは、右綴じの本を作るのか、左綴じの本を作るのかです。どちらにするかによって、綴じるときの余白を右にとって印刷するか、左にとって印刷するのかが決まります。（下図ピンクの部分）
一般に本文が縦書なら右綴じ、横書きなら左綴じとなります。



右綴じ



左綴じ

閉じ方向が決まったら、プリンターで原稿を印刷します。両面印刷をするわけですが、プリンターの機能によって印刷の仕方が異なります。

1. 1回の印刷で両面印刷ができるものや（両面オプション付きのレーザープリンターなど）
2. いったんすべての片面を印刷してから、紙を裏返しにセットして全てのもう片面を印刷するもの（最近のインクジェットプリンターや両面オプションのないレーザープリンター）
3. まったく両面印刷機能がないため、1枚ずつ、それぞれの面をセットして印刷しなければならないもの（古いタイプのインクジェットプリンター）

などがあります。1や2のプリンターの場合には両面印刷の設定で余白を設定する部分があります。この設定をすると、印刷データ自体を設定した余白分ずらして印刷してくれます。

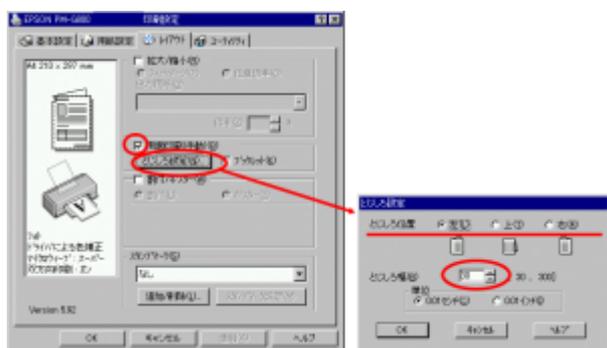
例えば紙の中心に丸を書いた2ページのデータに、「両面印刷-左綴じ-余白1cm」と設定して印刷すると、紙の表面は丸の中心が1cm右にずれて印刷され、紙の裏面は丸の裏面が左に1cmずれて印刷されます。両面印刷された紙を表から透かしてみると、左に余白が1cm付加され、丸自体は重なって見えるはずですが、

ちょっと難しいですかね。とにかく、「両面印刷-左綴じ-余白1cm」というように設定すると、製本した時に市販の本と同じような見映えで印刷してくれるということです。

ちなみに3のようなタイプのプリンターの場合、データ自体を奇数ページは右寄りに、偶数ページは左寄りに作っておく必要があります。

プリンターの機能や設定方法はお使いのプリンターの説明書をご覧ください。

一例ということで、インクジェットプリンターのプリンターの設定をあげておきます。



印刷が終わったら、正しい順序に並んでいるかよく確認します。特にページを入れている場合

にはページの数字と順番があっているかも確認しましょう。



溝切り

本文が印刷出来ましたので、背の部分でまとめる作業を行います。

手芸の本で紹介されている手製本の方法は、綴じる場合には、折丁をつくって、それぞれを重ねて糸でかがっていく方法が主です。しかし、糸でかがる方法は、熟練を要しますし、製作に時間もかかるため、今回はこの作業をホットメルトという熱で溶ける糊を使うことで簡略化します。

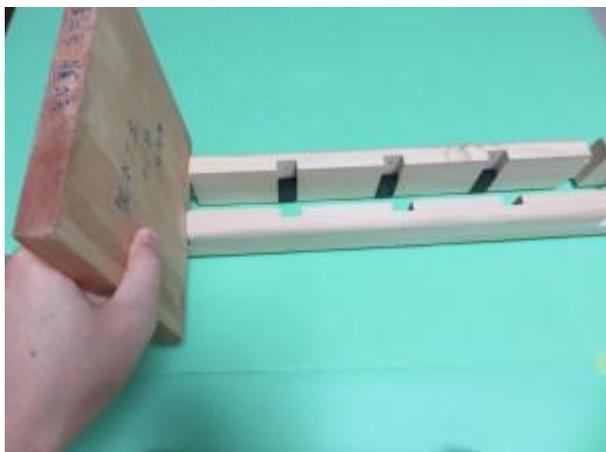
最終的には背をホットメルトで固めるのですが、その前段階としてホットメルトがよく浸透して、ページ抜けが発生しないようにするために、背に切込み（溝）を入れます。



まずは、原稿をよくそろえます。



製本機のネジをゆるめて逆さに置き、原稿が入る幅に開きます。



片側に足板を差し込みます



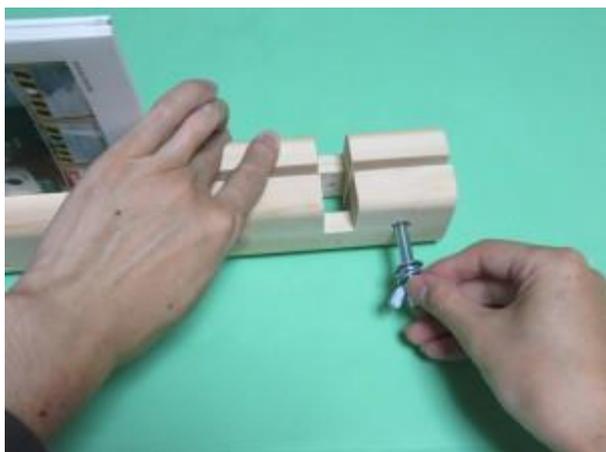
原稿を挿しこんで、上からトントンと落とすようにして背をそろえます。



横から足板に向かってトントン押すようにして、天地をそろえます。



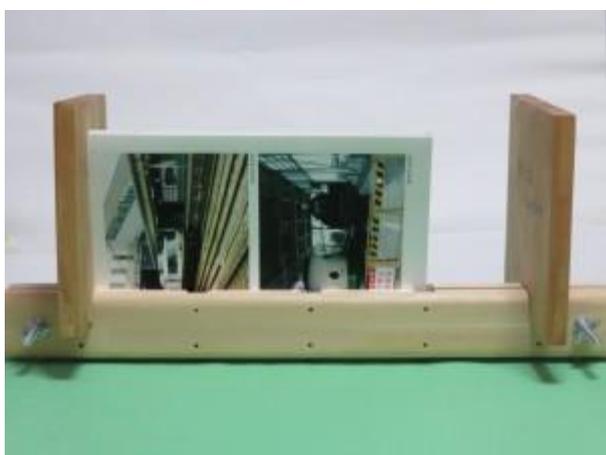
片手で締め板をしっかり押さえて、もう片方の手でネジを締めます。



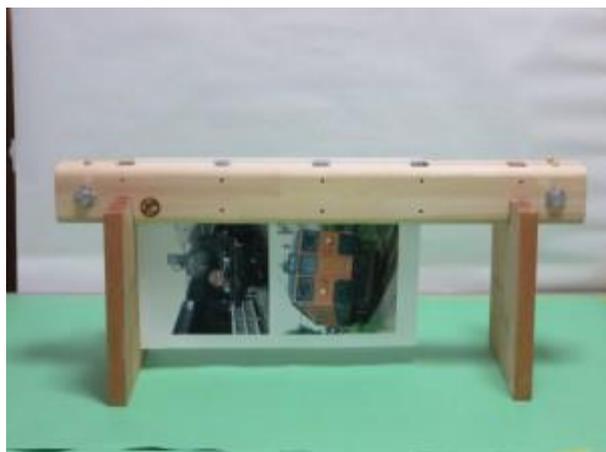
同様に反対側も、片手でしっかり押さえてもう片方の手でネジを締めます。



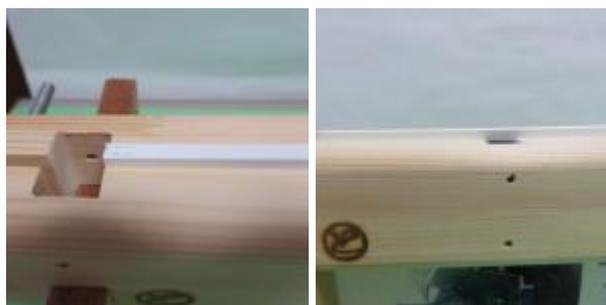
もう一方の足板も差し込みます。



このようになっているはずです。



足板を押さえながらひっくり返します。これで、固定具兼作業台ができました。



背の部分がでこぼこしておらず、きれいにそろっていることを確認します。

揃っていないようなら、再び、ネジをゆるめて先ほどの手順で原稿をはさみます。

原稿がしっかり固定されたので溝を切っていきます。

溝の間隔は**5ミリ間隔**で、**深さは0.5ミリ**が理想です。間隔は正確なほど仕上がりがきれいになります。深く溝を切るほど糊が浸透するようになりますが、深すぎると糊が浸透しきれず糊と背に空間が空いてしまいます。溝は深すぎるくらいなら浅いほうが望ましいです。

紙の束は、紙質にもよるのですが意外に固くなっており、コート紙の束などは溝を切るのにか

なりの力を必要とします。そのため、切るための道具は金ノコがよいと思います。

ここでは、当店オリジナルの「[溝切り名人](#)」を使って説明します。



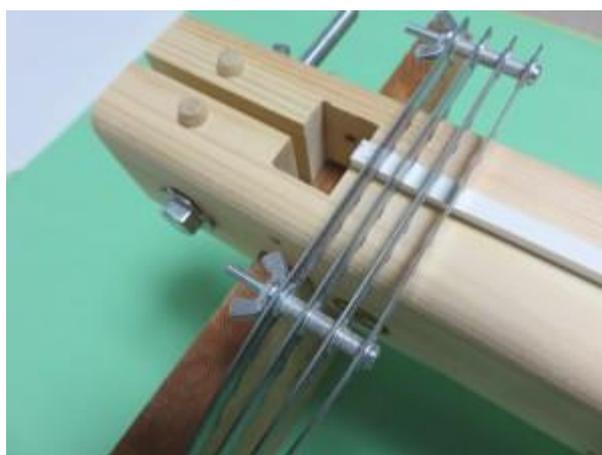
溝切り名人。4枚刃で素早く正確に軽い力で溝切りができます。



位置決めをするために、刃を背に角に斜めに当てて一気に引いて角に傷を入れます。



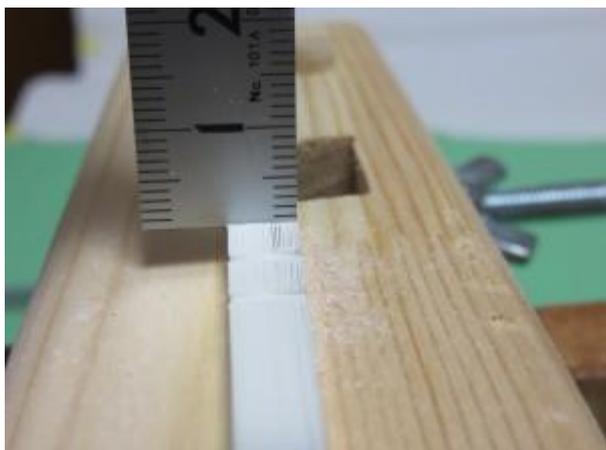
このように傷を入れます



傷に合わせて刃を前後して鋸引きしながら、徐々に刃を寝かせていって、4つの溝が均等な深さになるようにします。



1回で4つの溝が出来ました。



溝の深さの目安は0.5mmです。あまり深いとホットメルトが浸透しきれず、逆に強度が落ちてしまいますので要注意です。



背全体に溝が切れたら、濡れた布で紙の粉を拭き取ります。

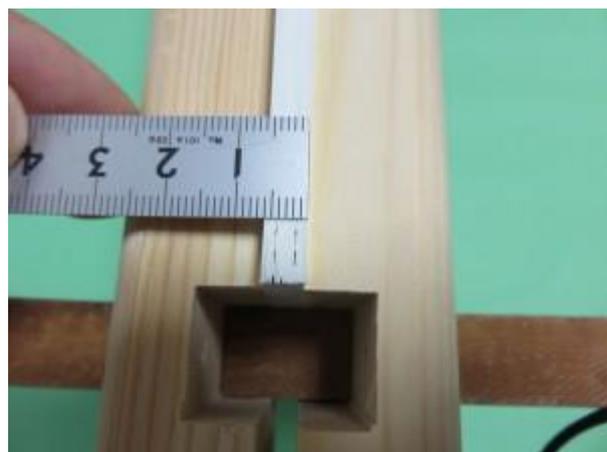


均等に溝を切るとこのようになります。

溝切りは、面倒な作業ですが糸綴じと違って、この部分とホットメルトの接着が**強度のキモ**となりますので、根気よく行ってください。

綴じ

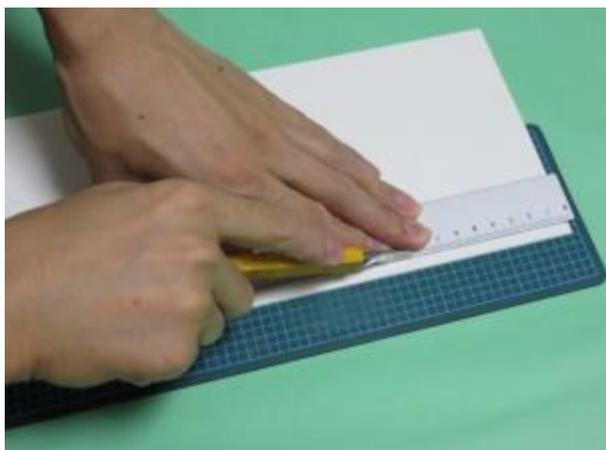
本文を製本機に固定したままの状態、ホットメルトで背を糊付けする作業を行います。強度を増すために、ホットメルトの上に**補強和紙を重ねてアイロンをあてて**、糊を溶かします。



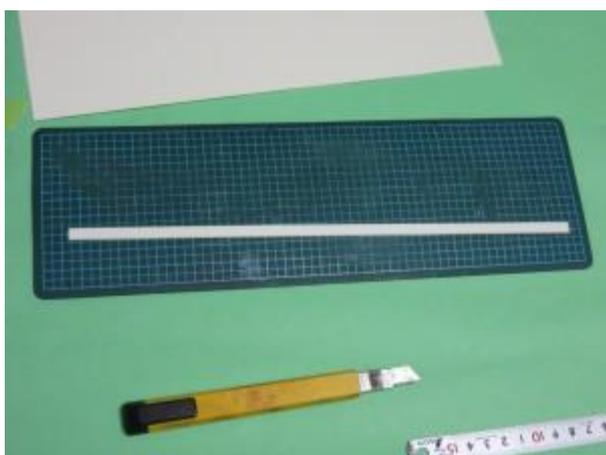
まずは、本文の厚さ（束厚）を測ります。6ミリです。



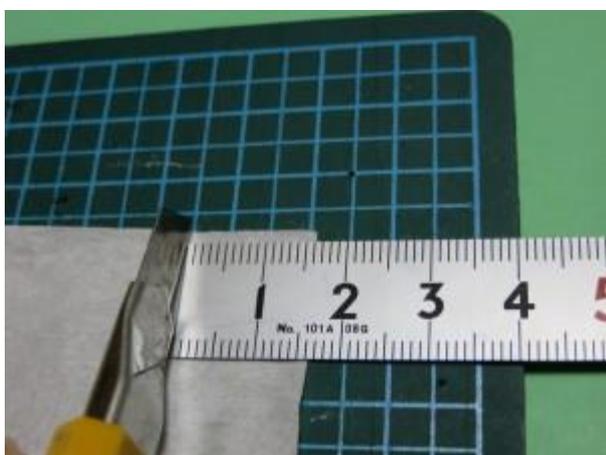
ホットメルトシートを6ミリの幅で切るために、カッターで6ミリのところに印をつけます。



印に定規を当ててカッターで切り落とします。



A4サイズ用のホットメルトシートを使っているので長さはそのまま切らずに完成です。



次に、補強和紙をカットします。平側に5ミリ
回し込みたいので、
左回り込み(5ミリ)+束厚(6ミリ)+右回

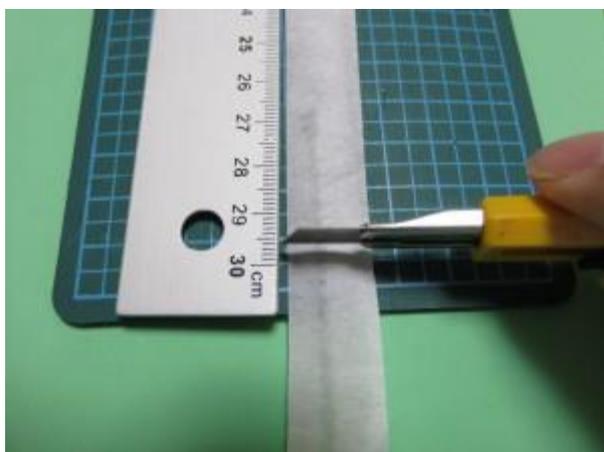
り込み(5ミリ) = 16で

16ミリの幅の短冊を作ります。

カッターで16ミリのところに印をつけます。



定規を当ててカッターで切ります。

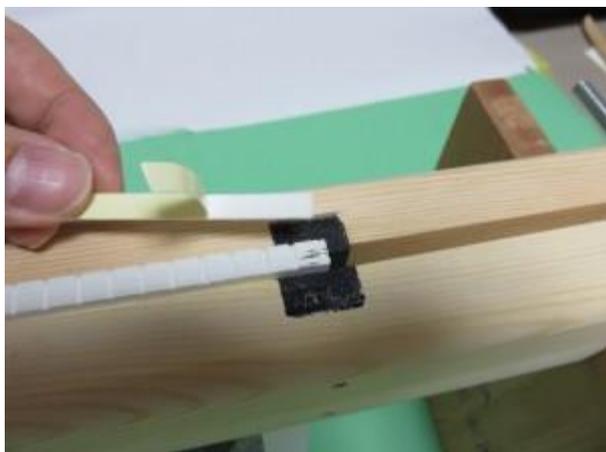


短冊の長さはA4用紙縦のサイズ297ミリで
切り落とします。

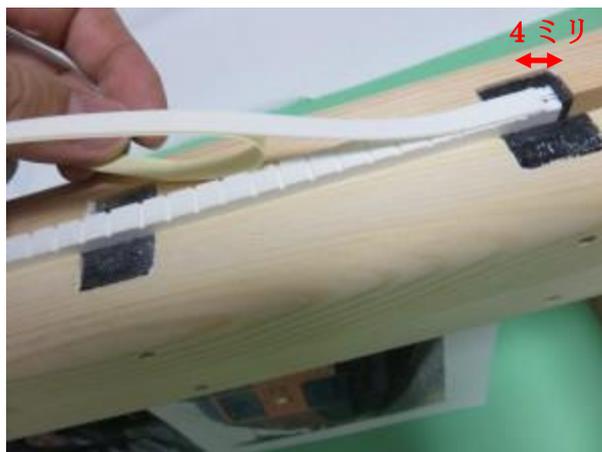


これで6ミリ幅のホットメルトシートと、16ミリ幅の背貼り紙ができました。

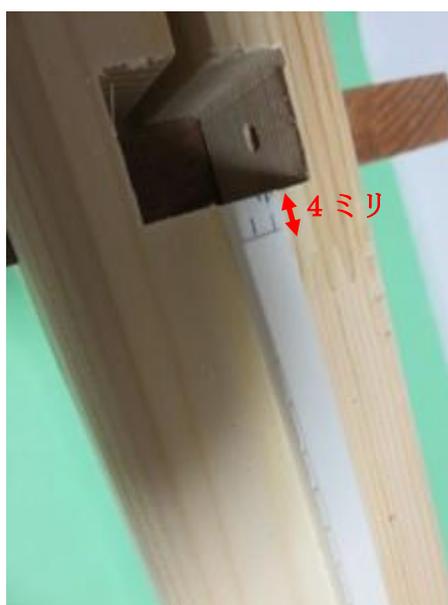
ホットメルトの長さが少し短いのは、アイロンの熱で溶けた時に広がるのでそれを考慮した長さです。



ホットメルトシート裏の剥離紙を剥がして背の端に貼り付けます。このとき、端から4ミリ離れたところから貼り始めます。

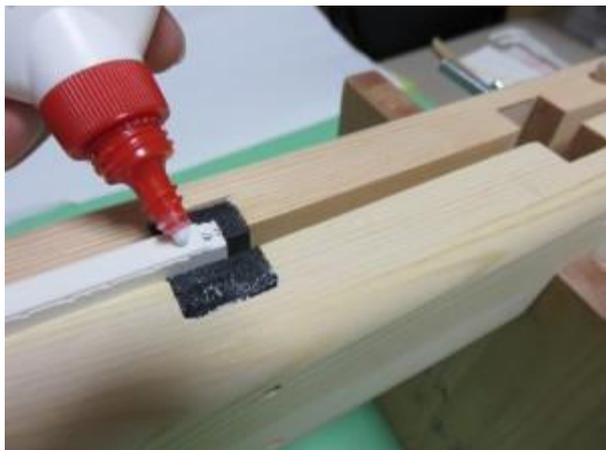


徐々に剥がしながら貼り付けます。

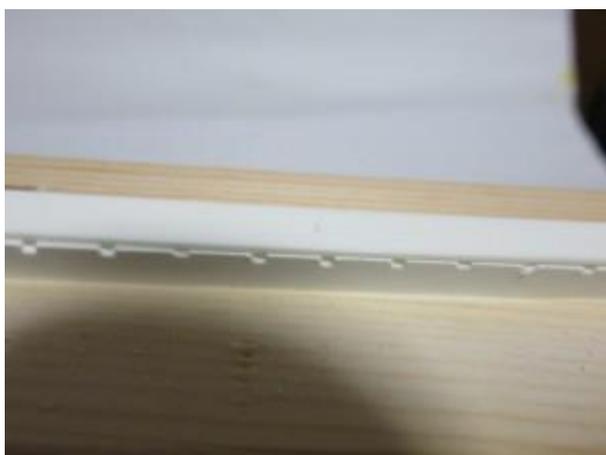


貼り終わった端も4ミリ隙間ができます。これで正しいです。

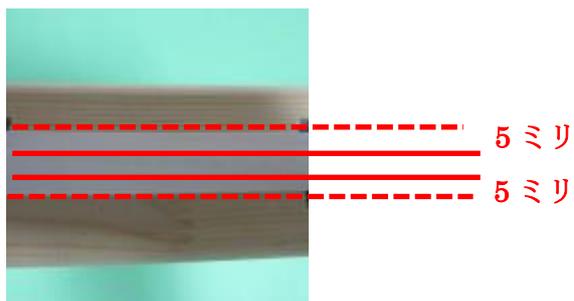
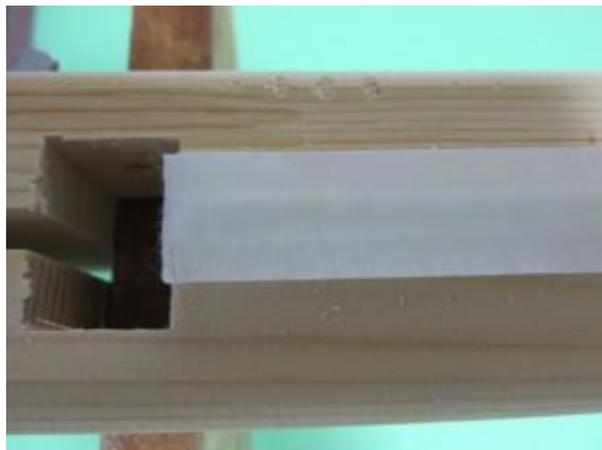
左右は背からはみ出していないことを確認します。



背貼り和紙を仮止めするためにボンドを点を打つように塗ります。



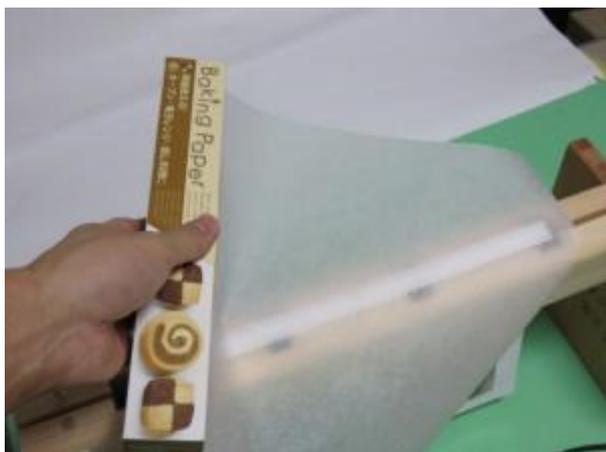
5センチ間隔程度でボンドで点を打ちます。



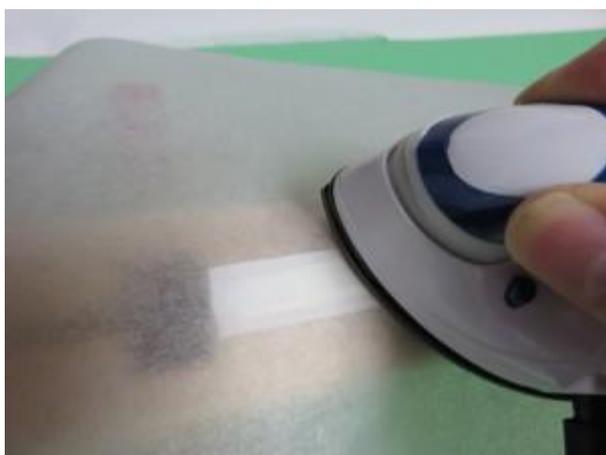
先ほど切り出した補強和紙を、背を中心として左右5ミリはみ出るように貼り付けます。



このようになります。



シリコンシートを背の長さより長めに切って背に乗せます。

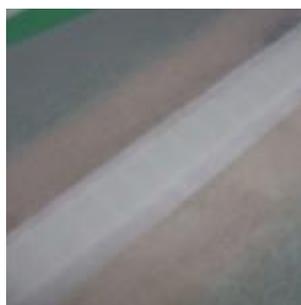


アイロンの温度設定を170度程度（中～高）に温めておいて、シリコンシートの上から背にあてます。

しばらくすると、ホットメルトが溶け始めます。少し溶けて山が潰れたと思ったら、移動します。



順に移動してホットメルトを溶かしていき、ホットメルトの山がすべてつぶれたら、今度は洋服にアイロンをかけるように左右にすべらせて、最終的には、まっ平らになるようにします。（実際には、背貼り紙があるのでまっ平らにはなりません。そういう感覚ということです）



このようにシリコンシートを通して溝がわかるようになればOKです。溝にホットメルトが浸透したということです。そのまま冷めてホット

メルトが固まるまでしばらく置きます。（3分程度）



十分冷ましたらシリコンシートを外します。



冷めたら製本機のネジをゆるめて本文を外します。



補強和紙が羽のようになっていますが、今のところこれで正しいです。



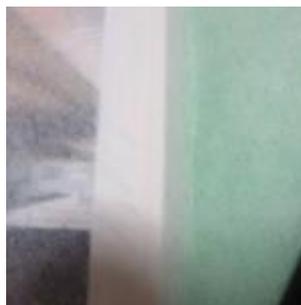
平を上にして置いて、背を覆うようにシリコンシートをかぶせます。



側面から補強和紙の羽の部分に平に回しこむようにアイロンをあてます。



平に回しこんだ部分を上からプレスするようにアイロンをあてます。



すべての羽が平に回りこむようにアイロンをかけます。



十分冷えたら、シリコンシートを外します。すこしホットメルトがはみ出ているかもしれませんが、この後の行程で、見返しと表紙を貼りますので気にする必要はありません。

見返しの作成

最終的には本文に表紙をつけるわけですが、本文と表紙のつながりを強くするために見返しを作成します。

2つに折った紙の片側を表紙裏に貼り、もう一方を本文に貼りつけます。

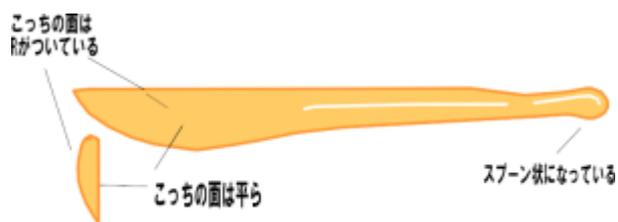
表紙裏に貼り付けられる方を「効き紙」、残った方を「遊び」といいます。



本文の背の角とを画用紙の角をピッタリあわせて置きます。



折りヘラの先の尖った方の平らな面を小口（背の反対側）に沿わせて紙に筋をつけます。



折りべらの形



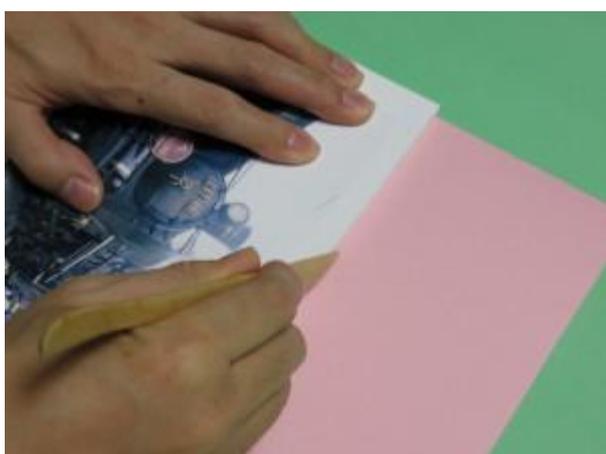
筋に合わせております。



折りべらの腹でこすって折り目を強くつけます。



折り重なっていない部分に定規をあてて、カッターで切り落とします。



ふたたび本文を載せて、今度は天にヘラをあてて筋を付けます。



筋の部分に定規をあててカッターで切り落とします。



これで本文の2倍サイズの見返しが出来ました。本文はA4サイズですので、A3サイズの画用紙が用意できるようにしたら半分に折るだけで、この作業は省略できます。

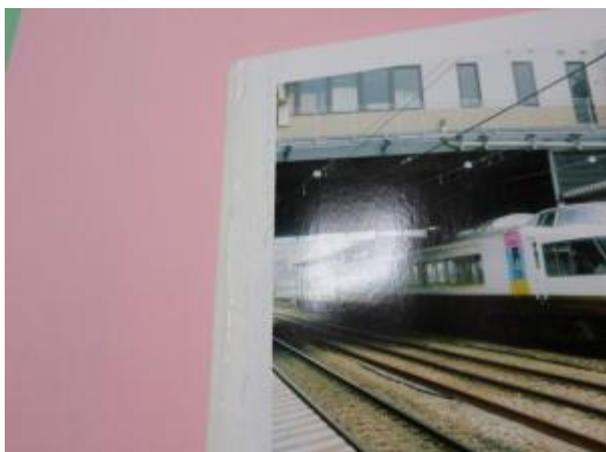


同様にして同じものをもう一枚作ります。

これで見返しが完成しました。見返しが出来たので、見返しの「遊び」の面を本文に貼り付けます。



本文の平の背側にボンドをのせます。後で延ばして5ミリの幅にしますので、背にそって滑らすようにやや厚めに載せます。



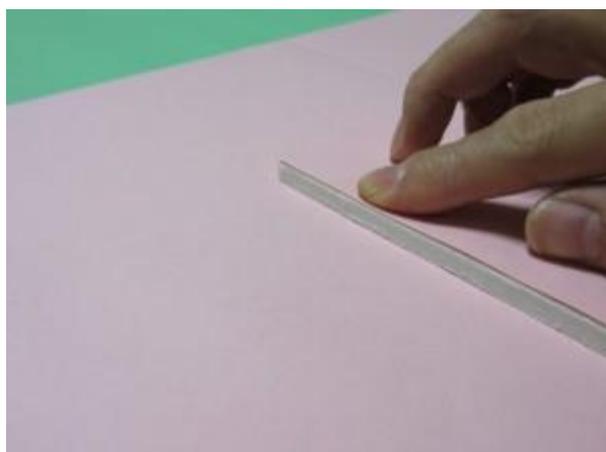
このようにボンドを背にそってのせます。



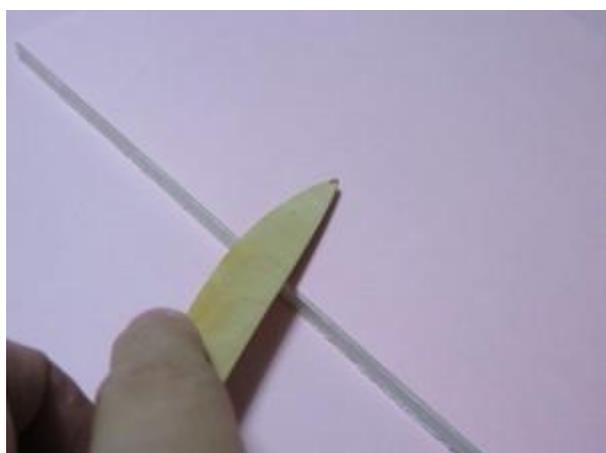
ボンド用のヘラで約5ミリの幅になるように延ばします。



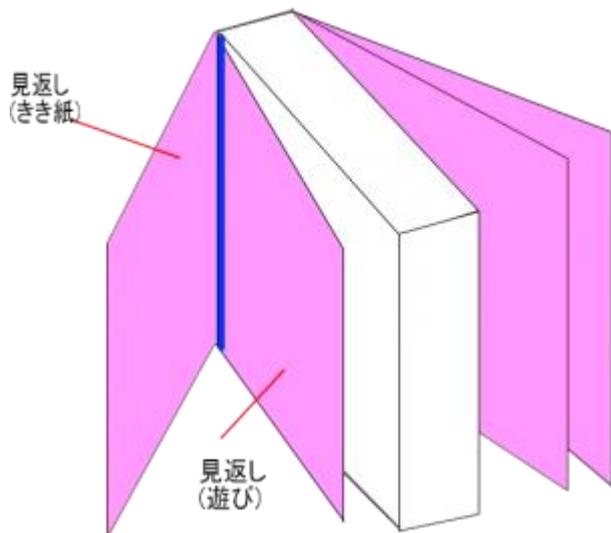
2つ折りにした見返しの折ってある方の辺の角をボンドをつけた辺の角に合わせます。



合わせたら上から押さえて貼り付けます。



ヘラの腹でしごきます。



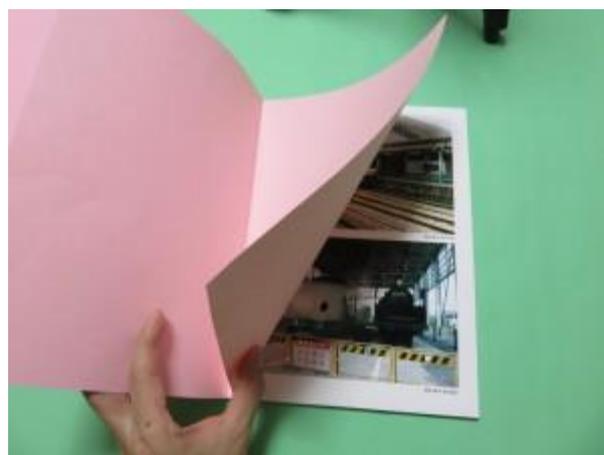
同様にして裏面も貼り付けます。イメージとしては上の図のように青い部分にボンドをつけて貼り付けた状態となります。



両面とも貼り付けたら、製本機で締めて乾くのを待ちます。



完成するとこのようになります。開いている部分が後ほど表紙に貼り付く効き紙になります。



左が効き紙、右が遊び、写真ページが本文です。

表紙の作成



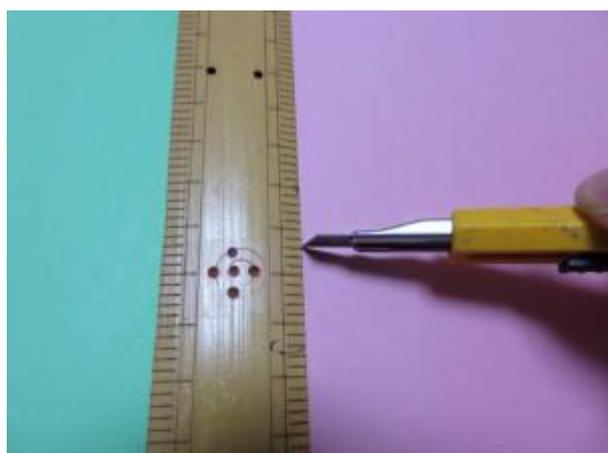
板目紙を2枚用意します。本文を保護するためにチリ（3方の小口が本文より数ミリ出ている

部分) を作りたいので A4 よりも大きなサイズの用紙を用意しました。

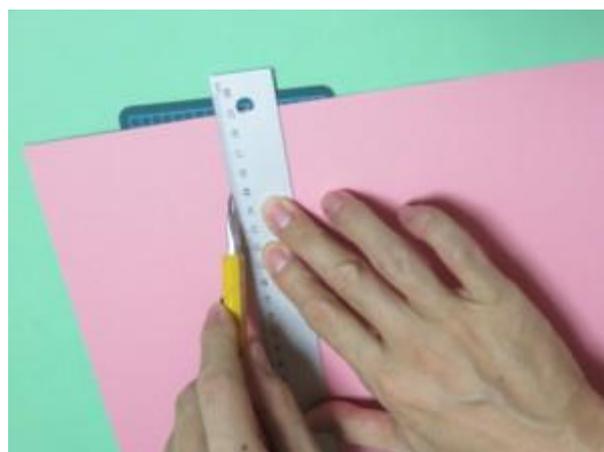
チリが必要ない場合は、A4 サイズの板目紙を 3 枚用意して、それぞれ表紙、裏表紙、背に使えば作業を簡略化することができます。



チリを天地 3 ミリずつ出したいので、A4 用紙の
高さ (297 ミリ) + 天のチリ (3 ミリ) + 地
のチリ (3 ミリ) = 303 ミリを測ります。



カッターで印をつけます。対辺も同様に印をつ
けます。



印に合わせて定規をあてて、カッターで切り落
とします。



前小口についてもチリを 3 ミリ出したいので、
A4 用紙の幅 (210 ミリ) + チリ (3 ミリ) =
213 ミリを測ってカッターで印をつけます。
対辺も同様に測って印をつけます。



印に定規をあてて、カッターで切り落とします。



背に貼る部分をつくるため、見返しをつけた状態の束厚を測ります。見返しのない状態では6ミリでしたが、見返しをつけてホットメルトで綴じた状態では7ミリになっていました。



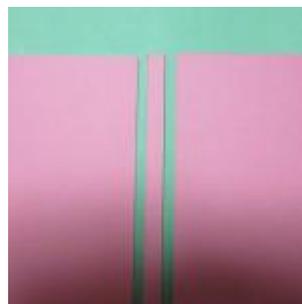
先ほど切り落とした余った部分を利用して7ミ

リの短冊を作ります。

定規をあてて7ミリの部分にカッターで印をつけます。対辺も同様に印をつけます。



印に定規をあてて、カッターで切り落とします。



これで表紙となる3つのパーツが出来ました。

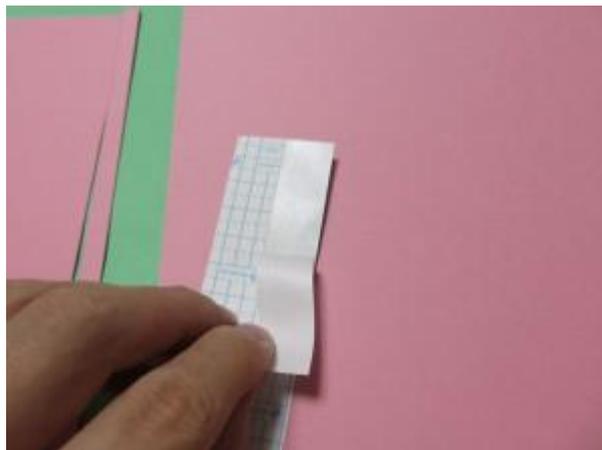


パーツを貼りあわせるために製本テープを用意します。35ミリ幅のテープを用意しました。

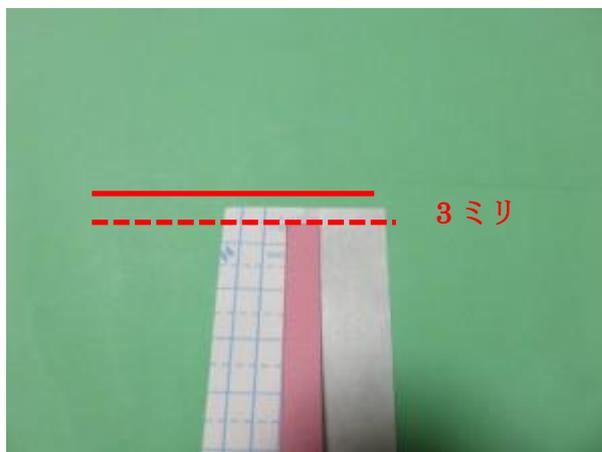


製本テープを

A4サイズの長さ(297ミリ) + 天のチリ(3ミリ) + 地のチリ(3ミリ) + 天の折り返し(3ミリ) + 地の折り返し(3ミリ) = 309ミリの長さにカットします。



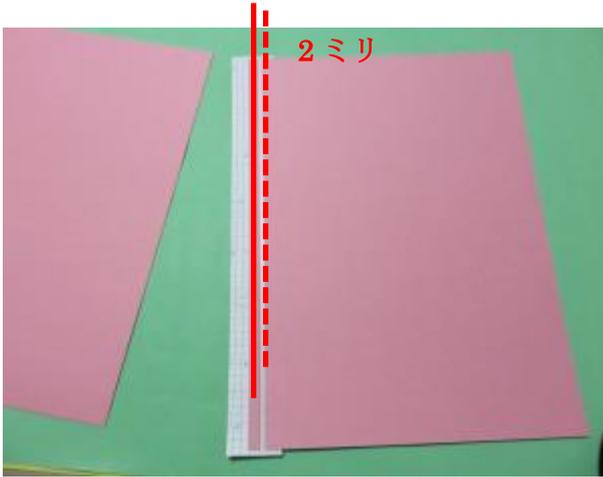
製本テープの剥離紙を半分剥がします。(剥離紙は中心で2等分されていて半分ずつはがせるようになっています)



テープの中心に背のパーツを上から3ミリ離して貼り付けます。



このようになります。



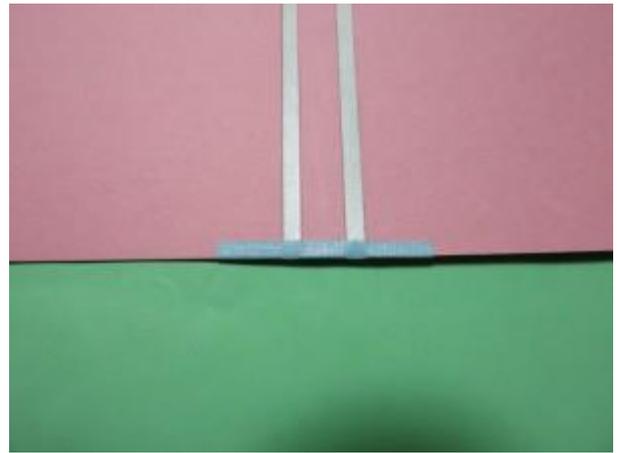
今貼った背のパーツから**2ミリ**離して表紙のパーツを貼ります。2ミリ離すのは、本を開いた時に開きやすいようにミゾを作るためです。



残った方の剥離紙を剥がします。



先ほど同様に2ミリ離してもう一方の表紙を貼り付けます。



最後にはみ出ているテープの端を内側に折り返して貼ります。



これで表紙の完成です。こちらの面が裏面（本に貼り付ける側）になります。



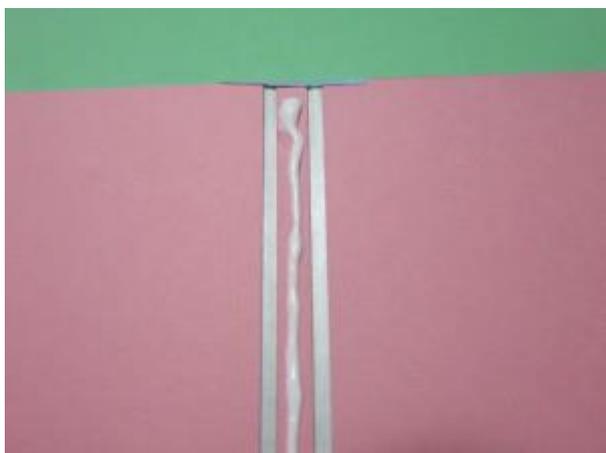
こちらの面は表面（平の側）になります。

表紙貼り

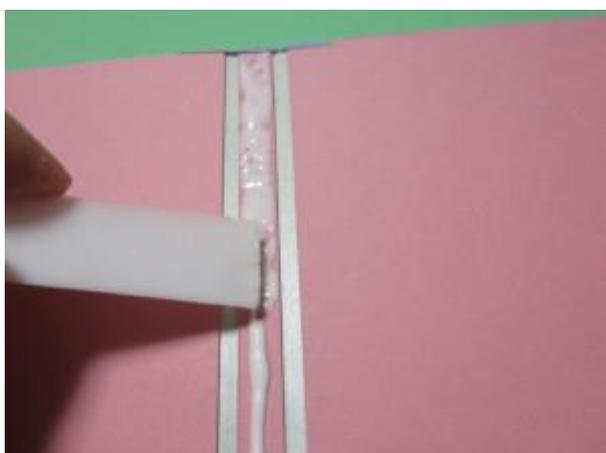
いよいよ表紙と本文を貼り付けて完成に近づけます。



表紙の背の部分にボンドをのせます。



表紙と本文をつなぐ重要な部分ですので少し多めに盛りつけます。



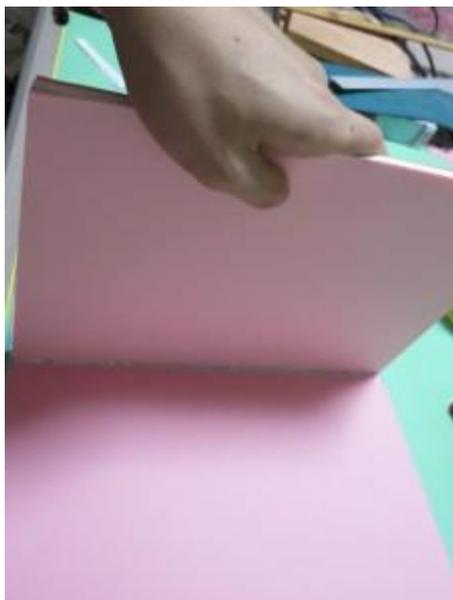
はみ出さないようにヘラで均等にのばします



まんべんなくボンドがのりました。



慎重に本文の背と表紙のボンドをつけたところを合わせます。



しっかり合ったら、上から押すようにして密着させます。



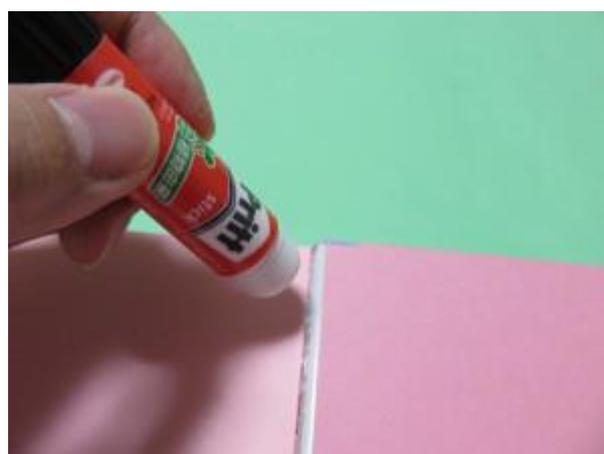
製本機で挟んで、ボンドが乾くのを待ちます。

見返しの糊入

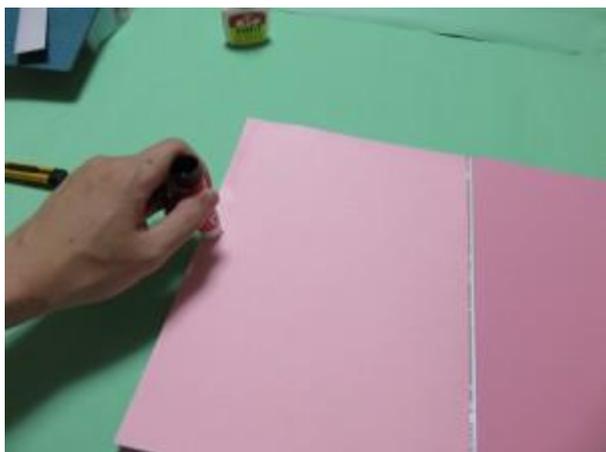
最後の工程です。表紙と見返し（効き紙）を貼り付けます。



製本機から外して、ボンドが乾いているか確認します。



スティックのりを用意します。ふつうの液体のりでもいいのですが、つけすぎると皺になったり一度つけると貼り直しが困難なため、水分のない固形のりを使うほうが作業が楽になります。



小口の**3辺**にスティックのりを塗ります。



効き紙をめくるようにして、表紙側に倒して貼り付けます。この時シワが出ないことと、効き紙と遊びが平面になるように気をつけます。



ウラ表紙も同様に貼り付けます。



足板で挟んで、締板で締めてのりが乾くまで固定します。（本の厚さによっては足板で挟むことが難しいかもしれません。その場合は、本に足板を2枚載せ重石をかけるなどしてください）

完成

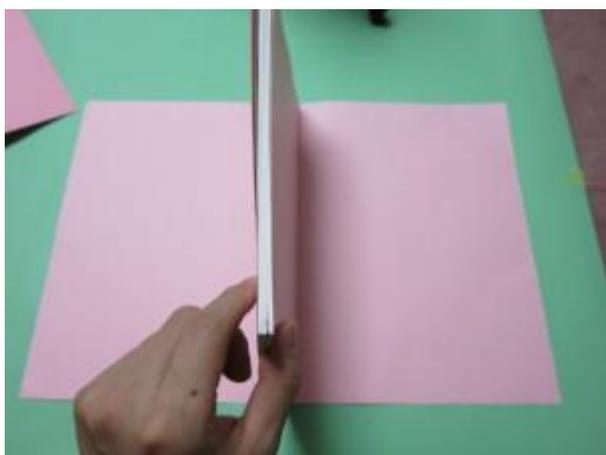
のりが乾いたら製本機から外して完成です。



外観です。



このようにチリ（本文より表紙が出ている部分）が出ています。



効き紙、遊びがついています。



天から見たところでは。



表紙をめくると遊びのページになります。



遊びをめくると本文です。



世界でただひとつの写真集の完成です。

付録

製本用ホットメルトシートの作り方



ホットメルトシートは出来合いのものを購入することもできますが、自分で作ることもできます。出来合いのものと違って切り取り線や裏面粘着はなく、見栄えもあまりよくありませんが、最終的には背に貼って溶かすものと割りきってしまえば、かなりコストを節約できます。

用意するもの



- [製本用ホットメルトチップ](#)（当店で扱っています）
- アイロン
- シリコンシート（クッキングシート）
- 古雑誌（ビニールコーティングされていないもの）

作り方

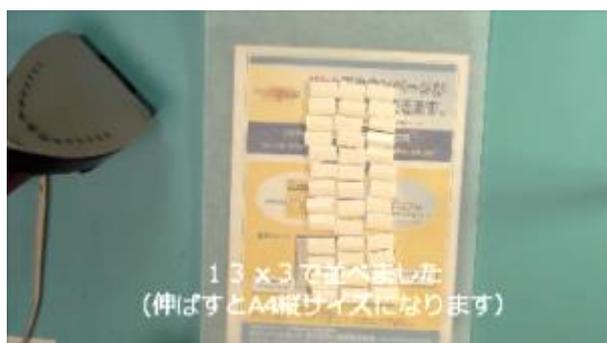
1. 古雑誌の上にシリコンシートを乗せます



古雑誌の上にシリコンシートを乗せます

2. 次に、ホットメルトチップを隙間なく敷き詰めます。A4サイズのシートを作るには、おおむね縦に13個のホットメルトチップを並べます。

写真では3列 x 13個のホットメルトチップを並べています。



ホットメルトチップを並べる

3. 並べ終わったら、上からシリコンシートをかぶせます。



上からシリコンシートをかぶせます

4. シリコンシートの上から、ホットメルトチップを押しつぶすようにアイロンをかけます。この時のアイロンの温度は160-180度(中~高)にします。



押しつぶすようにアイロンをかけます

5. ひとつおりのホットメルトチップがつぶれたら、シリコンシートの端を押さえながら、今度は均等な厚みになるように伸ばすようにアイロンをかけます。



伸ばすようにアイロンをかけます

6. 平らに延びたら冷えるまで待ちます。



冷えるまで待ちます

7. 冷えたら、シリコンシートを剥がします。



シリコンシートを剥がします。

8. これで完成です。使用するときにはカッターで必要な幅に切って使います。

製本専用のホットメルトチップですので、弾力性があり引っ張っても切れません。製本した場合には、背がやわらかく開きやすい本ができます。



完成です



引っ張っても伸びるだけで切れません

広告



製本キット スターターセット

製本機 とじ助 と手作りの本の製作に必要な道具8点がセットになった手製本の基本セットです。

このセットで「◆入門編◆30分で完成！ホットメルトシートと製本テープを使った本の作り方[50枚(100ページ)程度の冊子の製本方法]」でご紹介した本を作ることができます。(原稿や表紙の紙は別途ご用意ください)

- [製本機 とじ助 本体](#)
- [ホットメルトシート\(リヒト LAB 製\) X 1](#)
- [補強和紙 X 1](#)
- [シリコンシート X 4](#)
- [製本テープ 25MM または 35MM 黒 X 5](#)
- [ハンディ鋸 X 1](#)
- [折りヘラ X 1](#)
- [手製本の手引き 1冊](#)



製本キット デラックスセット

製本機 とじ助と手作りの本の製作に必要な道具をすべてセットにした15点入った豪華セットです。

このセットで「◆中級編◆ホットメルトシートと製本テープを使ったハードカバーの本(写真集)の作り方」でご紹介した本を作ることができます。(原稿や表紙の紙は別途ご用意ください)

- [製本機 とじ助 本体](#)
- [ホットメルトシート\(リヒト LAB 製\) X 3枚](#)
- [補強和紙 X 3枚](#)
- [シリコンシート \(5M\) X 1ロール](#)
- [製本テープ 25MM または 35MM 黒\(10M\) X 1ロール](#)
- [製本用背溝切り工具「溝切り名人」 X 1](#)
- [折りヘラ X 1](#)
- [ミニアイロン X 1](#)
- [ステンレス定規 \(15CM\) X 1](#)
- [ステンレス定規 \(30CM\) X 1](#)
- [カッター X 1](#)
- [カッティングマット \(A3サイズ\) X 1](#)
- [速乾ボンド \(50G\) X 1](#)
- [スティックのり \(10G\) X 1](#)
- [手製本の手引き 1冊](#)

お問い合わせ・ご購入

■ホームページ

<http://tojisuke.trylife.jp/>

■店名

製本工房□とじ助

■住所

〒950-2051

新潟県新潟市西区寺尾朝日通 10-28

■電話番号

050-7542-4074

■FAX

025-230-6439

■メール

tjsk-contact@trylife.jp

ご注文は、インターネットまたはFAXでのみ受け付けております。

製造から販売までひとりで行っており、機械を動かしているとお電話に気づかない時があります。

つながらない時には、お手数をお掛けしますが、メールかFAXにてご連絡をお願いいたします。

第1版 2015.10.1

第2版 2015.10.28